

進化か創造か

——アメリカの小さな町の教育論争、ヴェイスタ一九九二—一九四——

鵜う浦のうら 裕ひろし

一 はじめに

アメリカの科学界は生物進化を事実として受け容れ、生物進化論を科学として認めている。そして進化を否定し神の創造を唱える「創造科学論」を疑似科学として非難している。アメリカ最高裁は一九八七年に「宗教と国家の分離原則」（合衆国憲法修正条項第一条）に基づき公立学校の創造論教育に違憲判決を下した。それ以来、公立学校では科学の時間に創造論を教えることはできなくなっている。

しかし他方では、学会の否定や司法の禁止を無視して公立学校での創造論教育を執拗に要求し続けている人たちがいる。彼らはあるの手この手で進化論教育を阻止し創造論導入の機会をうかがっている。そのため、今でも創造論教育導入の危機に瀕する公立学校が少なくない。統計によれば、アメリカの子どもたちに創造論が広く浸透していることがわかる。一九九三年六月のギャラップ調査では、聖書の言葉を一字一句信じている子どもの割合は、一三

歳一五歳で四五%、一六歳になっても三一%にのぼるといふ。「アメリカ科学立国」のイメージが強すぎる私たちにほかなかな理解しがたいことかもしれないが、これがまさにアメリカの実情である。

それでは生物進化を拒み、聖書の創世記の内容を科学として教えようとする人たちとは、いったいどのようなアメリカ人なのだろうか。彼らに対抗し科学教育を守ろうとする人たちとは、いったいどのようなアメリカ人なのだろうか。そして、両者はいつどこでどのように衝突しているのだろうか。

こうした具体的な問題にこたえるため、本論では実際にこの種の対立にまきこまれた学校区に目を向け、対立の経過とそれにかかわった人たちに注目する。そうすることで、日本ではあまり知られていないタイプのアメリカ人像にいつそう迫ることができると考えたからである。

もちろんアプローチの一つとして、アメリカの大学を訪ねて識者の意見をうかがう機会がなかったわけではない。しかしこの問題にかんするかぎり、それは役に立たなかった。彼らは研究と論文執筆に忙殺され、私のように「くだらない問題」や「ばかげた人たち」にかかわる暇がないらしい。残念なことに、彼らの無関心が問題をいつそう大きくしている。科学教育に大きな影響力をもつ彼らが科学教育の現場に無頓着・無知であるのはまことに残念なことかもしれない。

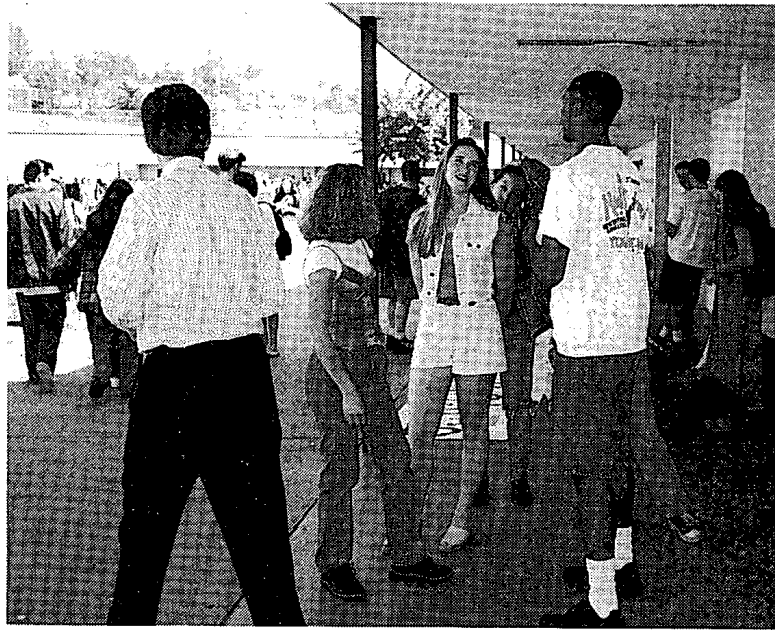
さて、本論の舞台ヴィスタ市（次頁の写真）はサザン・カリフォルニアにある。サンディエゴの北七二キロメートル、広大なアボガド畑と色鮮やかなお花畑に囲まれた小さな町である。人口約七二、〇〇〇、就学者数二三、〇〇〇人。大都市近郊に見られる典型的なベッドタウンといえよう。

サザン・カリフォルニアといえば、フロリダとならび、現役を退いた老人が余生を過ごす保養地である。とくに



ヴィスタ市ダウンタウン

退役軍人が多いためか政治的に保守的な土地柄である。またサンディエゴのダウンタウン、軍港、ビーチのほかにこれといった名所もないし、「昼間からビーチに寝そべって聖書を読んでいる人たちがいるところだ」という東部人のイメージもある。ただヴィスタ市のあたりは州内でも気候に恵まれた地域で、そのすばらしさは全国ネットで放送されたこともある。しかし、それ以外にはマスコミから注目されることのない町でもあった。この町は、ここ一〇年で大きな変化を経験している。かつて退役軍人とその家族だけが平穩に暮らしていたが、近年、メキシコ国境を越えてくる不法移民があとをたたず、人口は倍増している。学校の中はまさに人種のるつぼと化している。この急激な変化に現地の教育行政は財政的にかなり無理をして対応してきた。たとえば、学校では英語以外の言語でも教育を受けられる態勢をととのえ、学校内の人種バランスを保つためバス通学も用意し、貧困家庭の子どもにはフリー・ランチを提供してきた（次頁の写真はヴィスタ高校のキャンパス、教室）。ところが、このような優遇措置が呼び水となり、ヴィスタはさらに



ヴィスタ高校のキャンパス



ヴィスタ高校の教室

不法移民を引きつけ財政逼迫に拍車がかかるという、悪循環に陥っていた。他方では、こうした公教育の対応策やそれに伴う財政負担が昔から住む保守的なキリスト教徒の不満としてすでに鬱積していた。そして九〇年代にはいると、経済不況への不満と重なって、彼らがいつ行動を起こしてもふしぎのない町になっていたのである。^{*1}

一九九二年一月四日、ついに事件が起きた。大統領選挙と同時に行われた地方選挙で、ヴィスタ統合学校区の教育委員会が創造論を唱えるキリスト教ファンダメンタリストにのつとられた。一九八七年の最高裁判決以降、キリスト教ファンダメンタリストに牛耳られた教育委員会がはじめてできたのである。この教育委員会の動向は、公教育における「反革命」をもくろむ他地域の同じような教育委員会の動向を大きく左右することになる。つまり、もしこの教育委員会が創造論教育導入に成功すれば、全国的にもその可能性を開くことになる。そうなれば、再び大きな裁判が起きるかもしれないと思われた。

じつさい、ACLUはこの予想された裁判を「スコープスⅢ」と名づけ、即座に臨戦態勢をとった。かつてマスコミから「スコープスⅡ」とよばれた一九八七年裁判では、最高裁は進化論と同じ時間だけ創造論を教えるというルイジアナ州の「授業時間均等化法」に違憲判決を下し、「創造科学」を公立学校の科学の授業から追放したはずだった。しかし九〇年代に入り、これを無視する事件の頻発を見ると、どうやらこの判決にはあまり効き目がなかったらしい。一九二五年の最初の「スコープス裁判」の舞台テネシー州デイトンと同じように、この何の変哲もない小さな田舎町ヴィスタがあらためてテストケースとして全国の注目の的になったのである。

二 一九九二年一月教育委員選挙

(1) 教育委員の選挙

アメリカの教育委員会制度では、全国各地を学校区として細分し、学校区ごとに教育委員会が設置されている。教育委員は、基本的には選挙によって選ばれる地方公務員であり、任期は四年とされ、二年ごと（大統領選挙と中

間選挙の年)に半数が改選される。定数は五〜七人で、学区内の公立校への予算配分、教員の待遇、学校設備の拡充、カリキュラム、教科書、参考書などの検討と決定を職務としているが、報酬は低く、一般に(活動的で時間に余裕のある女性の?)名誉職だとみなされているところもある。

さて、話の発端は一九九〇年十一月の教育委員選挙にさかのぼる。このときカリフォルニア州では、「宗教的保守」ないし「宗教的右派」とよばれる団体の公認候補が教育委員に多数選出された。選挙運動期間中ほんとうの政治的・宗教的背景を隠したことが彼らの当選の要因だったという。そのため彼らの選挙運動はマスコミから「ステルス・アタック」と揶揄された。

宗教的右派の場合、市議会議員や教育委員を始めとする地方公務員の選挙運動を組織するのはシテイズンズ・フォア・エクセレンス・イン・エジュケーションCitizens for Excellence in Educationやクリスチャン・タイムズ・Christian Times、そしてTVエヴァンジェリストのパット・ロバートソンの政治組織クリスチャン・コアリションChristian Coalitionなどである。全国各地に存在する支部組織がそれぞれ地元をベースに選挙運動や学校カリキュラムの「改革」運動を展開する。これらの組織は共通して、人工中絶の制限、同性愛者の権利の制限、性教育の廃止、進化論教育の阻止、学校の教科書や参考書の検閲を目標とするが、こうした論点は共和党のもっとも保守的な主張と同じである。

これらの宗教的右派組織は年々勢力を伸ばす傾向にある。たとえば、シテイズンズ・フォア・エクセレンス・イン・エジュケーション(会長ロバート・シモンズ、コスタ・メッサ、カリフォルニア)は、設立から一〇年間、保守的候補者に教育委員選挙の勝ち方をアドバイスすることで、選挙ごとに成功をおさめ、組織を拡大してきた。こ

の組織が応援した教育委員候補の数は一九八八年の二五〇人から、九二年の三、六一一人に増えた。そのうち三八人がサンディエゴ地区にいた。

九〇年一二月の選挙の結果、カリフォルニアでは多くの学校区に一人ないし二人の創造論を唱えるキリスト教ファンダメンタリストの教育委員が誕生した。そのため次の選挙でさらに創造論者の委員が加われば、教育委員会内で多数派を形成することさえ可能な状況になったのである。ヴィスタ統合学校区でも一人の女性キリスト教ファンダメンタリスト、デイドル・ホリデイが当選していた。ちなみにホリデイはシティズンズ・フォア・エクセレンス・イン・エジュケーションのメンバーである。

続く一九九二年一二月の選挙でも、全国的に見ると、宗教的右派は組織間の協調体制が功を奏し、数百の教育委員、市議会議員の議席を獲得した。およそ五〇〇カ所の選挙戦を監視したピープル・フォア・ジ・アメリカン・ウェイ・ピープル for the American Wayによると、キリスト教ファンダメンタリストの候補はその四〇パーセント以上を占めたという。こうした全国的な傾向と反対に、カリフォルニアでは前回の選挙結果に危機意識をもったりべラな市民が創造論者の「ステルス・アタック」にだまされることなく、彼らの当選を阻止していた。

ところがヴィスタ統合学校区の選挙結果は次のようになっていた。票の収支計算に多少の誤差があるかもしれないが、その詳細をあげておく。

立候補者数 六人

登録有権者数 六一、三六一人（一人三票、全部で一八四、〇八三票）

投票者数 四七、四七五人 (投票率七七・三七%)

投票総数 九八、三六二票 (投票総数は一四二、四二五票)

| | | | | | |
|------------|---------|--------|---------|--------|-----|
| ジョイス・リー | 新人 | 当選 | 一九、〇四二票 | 一〇・三四% | 福音派 |
| ジョン・ティンダル | 新人 | 当選 | 一六、七五六票 | 九・一〇% | 福音派 |
| リンダ・ローズ | 現職 | 当選 | 一六、六八七票 | 九・〇六% | 穩健派 |
| マルシア・V・ムーア | 現職 | 落選 | 一六、四一一票 | 八・九二% | 穩健派 |
| ランス・ヴォルマー | 現職 | 落選 | 一五、二四一票 | 八・二八% | 穩健派 |
| ロバート・ヘックラー | 新人 | 落選 | 一四、二二五票 | 七・七三% | 福音派 |
| 新人の得票 | 五〇、〇二三票 | 二七・一七% | | | |
| 現職の得票 | 四八、三三九票 | 二六・二六% | | | |
| 白票 | 八五、七二一票 | 四六・五七% | | | |

選挙の結果当選したのは、福音派の新人ジョイス・リー、ジョン・ティンダルと現職再選のリンダ・ローズだった。つまり創造論や人工中絶反対を唱えるキリスト教ファンダメンタリストが三つの改選議席のうち二議席を獲得したのである。現職では穩健派が一人かろうじて最下位当選を果たしただけで、残りはあえなく落選している。教育委員会のメンバー構成は次のようになった。

デイドル・ホリデイ (福音派、前回当選、今回非改選)

サンデュー・カーター (穏健派、前回当選、今回非改選、ユダヤ人)

ジョイス・リー (福音派、今回当選)

ジョン・ティンダル (福音派、今回当選)

リンダ・ローズ (穏健派、今回当選)

リーとティンダルが現職のキリスト教ファンダメンタリスト委員デイドル・ホリデイと合流し、教育委員会内に多数派を形成するのは明らかだった。要するに、彼らは思いのままに委員会を運営できるようになったのである。

(2) かつての悪夢の再現か

リーとティンダルが当選した翌日、学校には「死体安置所のように」重苦しい雰囲気漂っていた。オレンジ・カウンティの住民や教員はこのさき公教育がめちやくちやにされるのではないかと不安におののいていた。落選した現教育委員会委員長のマルシア・V・ムーアは「ヴィスタ市民がこんな事態を招くなんて信じられない」と悲観した。ヴィスタ教員組合の副会長ポール・メティビアは「彼らがいったいどういう議題をもちだすか、予想もつかない」と頭を抱えた。現職当選の穏健派リンダ・ローズは新聞インタビューにこたえて、今回の選挙はこの学校区の教育方針をめぐる「厳しい対立の幕開け」になるだろうと述べ、キリスト教ファンダメンタリスト委員との対決姿勢を表明した。実際このさき市民にとっては眠れない夜が何度かおとずれることになる。

他方ホリデイ、ティンダル、リーの三委員は、この学校区の将来について明確な目標を持っているわけではないと断りながらも、彼らの方針がこれからの委員会運営を大きく左右するだろう、と勝利を宣言した。

このさきを占うには、選挙運動期間中彼らが提唱してきた公約をまとめた、一九九二年一月一六日付けの『ロサンジェルズ・タイムズ』紙（サンディエゴ版、P.10）が役立つ。その主な項目をあげておく。

■図書館の本の利用方法を制限すること。親が反対するすべての本に星印をつけ、親のサイン付きの許可がなければそのような本は借りられないようにすべきだ、とリーは主張している。

■進化論と同じくらい科学的長所を持つ創造の聖書理論を教えること。サンティー市の創造研究所につとめるティンダルは「私は明らかに創造科学に親近感を覚える。教室で両方の仮説をどちらも真理としてではなく提示する方法で教えることには利益があると思う」と述べている。それを受けてリーも「もし進化論が仮説ならば創造論も仮説であり、私たちは子どもたちにクリエイトタイプに考える大人になるように教えているのだから、どうして一つだけでなく二つの仮説を教えないのか」と述べ、さらに「創造研究所への訪問を推薦し、自分の友だちもそこを訪れてから、無神論者からクリスチャンに変わりつつある」と続けた。

■性教育を改革すること、エイズが同性愛者のセックスを通して広がるかどうかについての情報を除くこと、避妊について学ぶ機会を減らすこと。リーは性教育コースから同性愛への言及をすべて削除し、人工中絶は不妊と精神障害を引き起こすことを教えたという。さらに、彼女は性教育コースから避妊情報を排除し、その代わりに土曜日に子どもとその親を対象に通年の任意登録クラスをもうけ、産児制限情報の提供を提案してい

る。

■この学校区の二カ国語プログラムを変更すること。この学校区の二カ国語プログラムには欠陥があるので、そのプログラムを改訂し、減少しなければならないと、リーとティンダルは言っている。しかし反対派によると、彼らの本当の目的は移民の子どもたちのためのプログラムを縮小することだという。

さらに『ロサンジェルズ・タイムズ』紙は、一人の元副教育長の回想を通して、かつて同じような事態が生じたときのことをふりかえっている。一九六四年から六八年にかけて、ラ・メッサ・スプリング・ヴァリー学校区（同じサンディエゴ・カウンティ内）の副教育長を務めたデイヴィッド・パスコウは、ヴィスタの成りゆきを悪夢の再現だと予想した。当時、彼の学校区の教育委員会はキリスト教ファンダメンタリストで構成されていた。「確かにひどかった。ほんとうにへんなことが続いた。また起こるか？ 当然だろ。」短命だったが、その委員会は性教育を廃止し、教員に教室でプレーヤー（祈祷文）を読むよう強制した。ただし、後者については違法宣告を受けた。科学の時間に創造論を教える準備をすすめ、目上の人が部屋に入ってきたとき学生は起立しなければならないなど厳格な規則を制度化した。また、その委員会は学校区の公立学校で全国統一テストの実施を中止したことがある。そのテストに最高裁を風刺した「非愛国的な」漫画があったからだという。そのうち学校を去る教員が続出した。一八人の教員のうち一四人が辞めた学校もあった。またその委員会は上級の事務官に辞任を要求した。彼らが拒否すると、共産主義者だという通報に基づいてやってきたFBIが彼らを尋問した。教育委員会の会合はよる遅くまで続き、暴力沙汰も起こった。委員会の方針変更を実行する立場にあったため、パスコウ自身も脅迫や中傷の手紙

を受けとった。委員会の方針にみんな落胆し、その後遺症はしばらく続いたという。

はたして、ヴィスタは予言通りになったのだろうか。

(3) 三人のキリスト教ファンダメンタリスト委員の素顔

デイドル・ホリデイはロサンジェルズ生まれ、四〇代後半の小柄な女性である。カリフォルニア州立大学ノース・リッジ校で芸術学を専攻した後、サンディエゴ州立大学で看護学を修め、卒業後は訪問看護婦をつとめてきた。結婚して二〇年、現在二男二女の母親である。人工中絶反対を唱えるプロ・ライフの活動家として知られている。もちろんファンダメンタリズムの一部として創造論を肯定し進化論教育に不満を抱いているが、どちらかといえば次に述べるリーの場合と同じく現行の性教育に強く反対している。一九九〇年に教育委員に立候補した動機について私が電話でたずねたとき、「教育行政にたずさわることには、市民としてまた親としての義務であり特権であるし、現在の社会の方向や価値観はまちがっていると思ったからだ」と答えてくれた。まさに聖書の教えるところである。

一九九二年の選挙で一位当選のジョイス・リーはなぜか年齢を隠しているが、四〇代であることはまちがいない。幼いころに父と死別し、その後一九五〇年代、六〇年代に母親の手で育てられ、その間に母親の影響からキリスト教を信仰するようになった。婚前交渉はいっさいなかったため、結果として、自由奔放な友だちのような「心の傷」を負わずにすんだという。ミッション系のカレッジを卒業し、カリフォルニア州立サン・バーナディノ大学から教員資格をとっている。小さな超宗派教会の牧師をしている夫デイヴィッドとの間に、二人のブロンドの娘がいる。

二四歳の義理の息子（夫の連れ子）はクリスチャン・ロック・バンドをやっているという。結婚以来二〇年間、いくつかの学校で教鞭をとり、この三年間はヴィスタで代用教員をつとめていたが、今回の当選でその職を中断した。リーにとって、最大の問題は学校教育と家庭教育の矛盾である。たとえば、「結婚初夜はヴァージンで迎えるべきだ。これこそ正しい道だ」と家庭で（夫に連れ子がいるのに）教えている。しかるに学校では「セーフ・セックス」を勧める。「セーフ・セックス」は結局のところ病気を伝染させ未婚の母をつくりだす危険な行為であるから、学校は性教育と称してまちがいを教えているのだという。

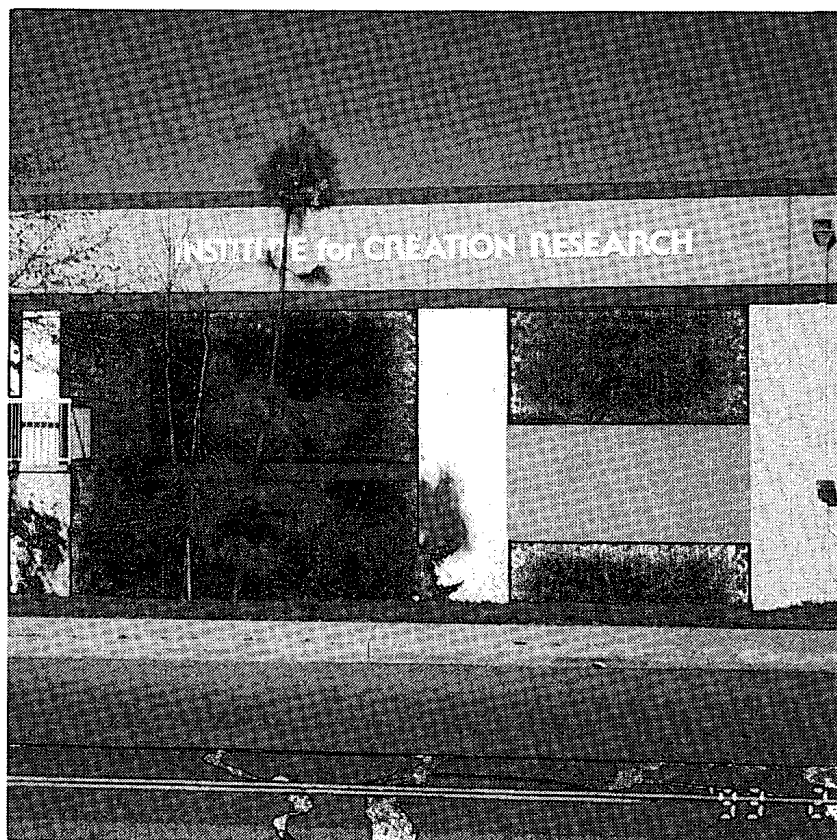
実際、彼女は娘を数年間ホーム・スクーリングで教育したこともある。要するに彼女の目的は、子どもたちにキリスト教道徳を教え、生物進化論を始めそれに反する教育をすべて廃止していくことにある。「教会と国家の分離は認めても、教会とジョイス・リーの分離はない」という言葉に彼女の信仰の強さがうかがわれる。

二位当選のジョン・ティンダル（次頁上の写真）は、グレイの髪、やせ形の紳士という風貌である。サンディエゴ近郊のサンディー市にある創造研究所（次頁下の写真）で経理を担当している。同研究所は「創造科学」の先駆者ヘンリー・モリスによって設立され、幅広く創造論の啓蒙活動を展開している組織だ。一九四七年サンディエゴでセールスマンかつ弁護士之父と専業主婦の母のあいだに生まれ、サンディエゴ州立大学の近くの中流階級の地域で育った。

ティンダルはサンディエゴ州立大学へ入学し、経済学を勉強した。すぐに六〇年代のリベラルな価値観に染まり、髪をのびし、ロック・ミュージックを聴き、両親が期待した信仰心などすっかり忘れてしまった。当時を顧みてティンダルは、六〇年代はすべての人が神以外のものに意味を見いだそうと思ひ違ひをしていた時代であるという。



オフィスのティンダル氏



サンティー市の創造研究所

一九七〇年、彼は軍隊に志願し、ベトナムで二年過ごした。しかし将校クラブの經理士となり、実戦部隊に配属されることはなかったという。

一九七一年に兵役を終え、生活に行き詰まったティンダルは、一家を連れてオーストラリアへ移住することに決

めた。「逃避だった。落ちこぼれだった。当時は、もっと良い土地があるはずだと思っていた。空き地を見つけ、穀物を育て、自立するというアメリカン・ドリームを信じていた。誰にもじゃまされず、誰をもじゃまさない。このアメリカン・ドリームを履行したかったのだ。」ティンダル一家はインド洋に近いオーストラリアの田舎町で七エーカーの土地を購入し定住した。短期間だったが合衆国を出る前の教職経験を活かして、カトリック系の学校の教員になった。そのあと私立学校や公立学校でもに経済学を教え、アボリジニーの学校の校長を務めたこともある。

この間に、近所のキリスト教徒の影響でティンダル一家は信仰心を取りもどすことになる。数年後、ティンダルは「神がほんとうに大切なことを望んでおられる」と感じるようになった。「子どもを育てる場所を決めなければならなかった。教育に重要なのはアメリカの遺産だ。アメリカはすばらしい国だ。そこには敬虔な心があるからだ。神はほんとうにアメリカを祝福している。」故郷アメリカで子どもを教育すること、それが神の思し召しだった。

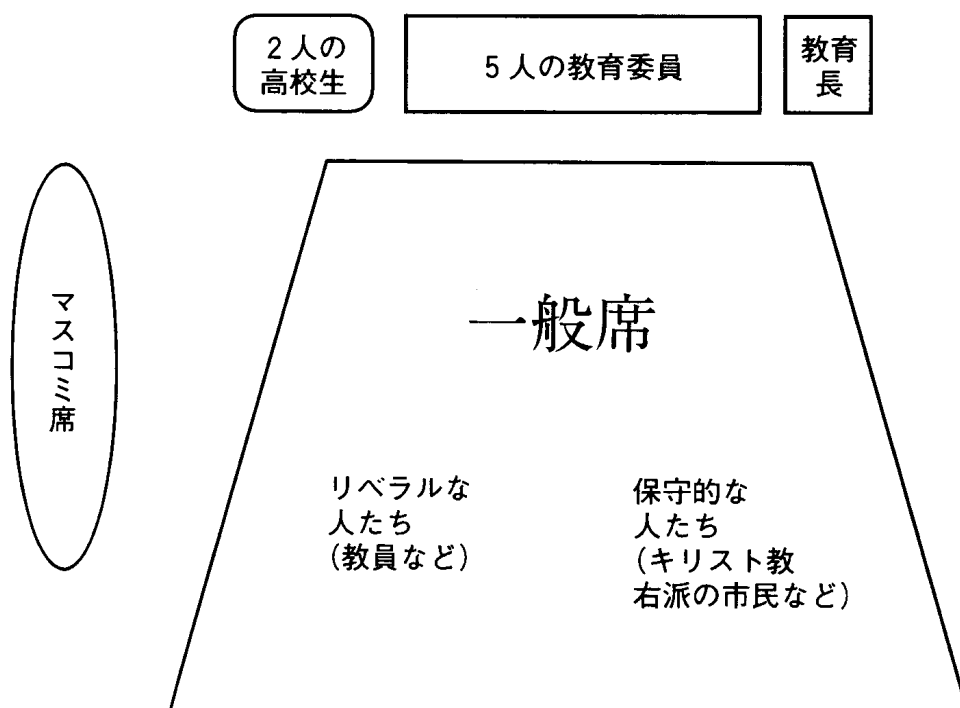
六〇年代の学生運動を経験したあと紆余曲折を経て、結局彼は八〇年代の共和党スタイルの保守主義に落ちつくことになる。一九八七年、夫妻と四人の子どもたちはヴィスタに移り、ティンダルはサンティーの創造研究所に就職し、妻は主婦となった。夫妻はすぐに学校活動に入った。選挙の前年、ティンダルはヴィスタの宗教保守団体に所属し、学校教育委員会で何度か熱のこもった演説をしている。「学校は子供たちに精神的な指導をまったく与えていない。だから、彼らは坂を転がり落ちるように墮落してしまうのだ」と述べ、学校教育におけるキリスト教道徳の必要性を力説したのである。

三 新しい教育委員会の展開

(1) 一九九二年二月一〇日の教育委員会全体会議

当日、最初の全体会議で新委員の就任式がおこなわれた。一六〇人の聴衆が会場を埋め尽くしていた。およそ二〇人の記者とカメラマンが臨席し、その中にはCNN、ABCテレビ、『タイム』誌、『ニューヨーク・タイムズ』紙、『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙が含まれていた。テレビ用のライトやカメラマンのストロボなどマスコミが見守るなか、二人のキリスト教ファンダメンタリストがバイブルに手をおき、大統領就任式と同じように、宣誓を行った。こうして四年の任期がスタートした。

会場内部については下の図を見ていただきたい。教育委員会の全体会議はふつう学区内の公立学校の体育館を使用する。正面中央のステージに教育委員、その右に区教育長が司会者として、その左に二人の現役高校生がオブザーバーとして着席する。彼らには発言権はあるが投票権はない。一般席では右側を



まさに宗教右派の市民や親が占め、左側をリベラルな市民、親、そして教員が占める。この配置は今でも変わらない。場内には不安と期待が交錯し、聴衆はヴィスタ統合学校区の将来を危惧する者と祝福する者との二極分化していた。

新委員会はまず最古参の委員リンダ・ローズを委員長に指名する動議を三対二で否決した。代わりに、リンダ・ローズやサンディー・カーターよりも在任期間の短いデイドル・ホリデイを委員長に指名し、ジョン・ティンダルを書記に任命した。すぐに会場から「委員はすべての問題について先入観をもちこまないでほしい」と、不満の声があがった。ヴィスタ教員組合長トム・コンリーは「私たちはみんなコミュニティーの一部だということを忘れてはならない」と述べ、委員会の決定にはコミュニティー全体の意見が反映されるべきだと牽制した。しかし創造論を唱える三人のキリスト教ファンダメンタリストの間に投票ブロックが形成されていることは明らかだった。この委員会は名実ともに乗っ取られたのである。

そのあとホリデイは委員長就任の挨拶の中でプレーヤー（祈祷）をおこない、神に二度言及した。これが会場を刺激したのか、敬虔な信者の一人ヘレン・ロシエは、「今こそプレーヤー（祈祷）と創造論を学校教育に導入すべきときです。これは別に過激なことではありません」と述べた。他方、海洋生物学者ジョン・リューベンコフは数百万年前の貝殻の化石を手に進化を説明したあと、教育委員に対し「あなた方の中に、この小さな貝殻の真実を隠し創造論を科学と同じレベルで教えようという人はいますか」とたずね、さらに「創造論を科学として教えるのはウソつきのすることです」と続けた。この発言に会場はざわめいたという。

結局、カーター委員がこの問題を一月の全体会議で質議事項としてとりあげるよう要求し、議論をまとめた。こうして次の会合では、この学校区の創造論導入について全体で議論し、各委員が自分の見解を表明することになった

たのである。本番は次回にもち越されたものの、波乱ぶくみの幕切れだった。

(2) 一九九三年一月二一日教育委員会全体会議

当日、誰もが長くホットな夜になると予想していた。教育委員会委員長のデイドル・ホリデイは冗談まじりに「朝食を用意したほうがいいんじゃない」と記者をからかっている。

会場には親、学生、弁護士、科学者、記者、TVカメラマンなど、五〇〇人以上の人が集まった。以前はせいぜい五、六〇人だった参加者が一挙に一〇倍に膨れ上がった。まさに異常事態である。三五〇人が会場のオーデイトリウムに收容されたが、二〇〇人ちかい人たちが外にあふれた。会議が始まると、彼らはオーデイトリウムの外壁をたたき、「聞こえないぞ」と怒鳴りつづけたため、窓が開けられた。他方、会場内の聴衆は委員にヤジを飛ばしていた。こうした怒号のなか、騒然とした幕開けとなった。

前回一二月の全体会議で決められた通り、最初に創造論教育の議題にはいり、フロアーから創造論教育の是非について合計二一人がそれぞれ一分ずつ意見を述べた。

まず科学者が発言台に立つ。サンディエゴ州立大学生物学教授J・デイヴィッド・アーチボルトは、トリセラトプス・デイノザウルスの鼻骨と六千六百万年前の有袋動物の顎を聴衆に示しながら、「現在では科学者の間で進化が起こったか否かの議論はまったくありません」と断言した。さらに「科学はもはや地球が丸いか平たいか、重力があるかないか、また地球が太陽の周りを回っているかどうかを調べるためにお金と時間をかけないのです」と続けた。自称海洋生物学者のジョン・リューベンコフは一段と激しい口調で委員会を非難した。「おまえたちは

この会合を討論なし、問題なしで片づけようとたくらんでいる。おまえたちはみんな宗教理論に実験室の白衣を着せたがっているが、そんなことはさせないぞ」と述べ、「もしほんとうに創造論を信じるなら、おまえたちは神も恐れるような病気で死んでしまえ」とはきすてるように言った。この暴言に対しては、さすがに会場全体からブーイングがおきたという。

次に聖職者の冷静な意見が出る。ラビをつとめるマイケル・ゴットリーブは「まず第一に、聖書は科学の本ではありません。科学とはまったく関係ないものです」と、両者の混同を冷静に戒めた。ジェリー・ステインソン牧師は「私は創造説に深い愛着をいっていますが、それが科学の授業時間に属しているとは思いません」と語った。

創造論側の反論も見ておこう。テッド・リーは「もしアメリカを愛し、子どもたちを愛しているならば、教室に創造論を導入するか、教室から進化論を追い出すしかありません」と主張した。ロバート・ヘックラー（前年一月の教育委員選挙で落選したキリスト教ファンダメンタリスト）は、「サルがヒトに変わるのを見たことがありませんか。物質から生命ができる確率は、くず鉄置き場を通過した竜巻が滑走路で離陸準備を完了したボーイング七四七型機をつくる確率と同じなんです」と発言した。学校区内の公立校に三人の子どもを通わせているクリス・フォーブスは「もし学校で進化論を教えるなら、創造論も教えるべきです。そうすれば、子どもたちはどちらかを自分で選ぶでしょう」と発言した。また、「委員会が創造論を指定する必要はないと思います。その代わりに、進化主義者と創造主義者との間のランチタイム・デイベイトを許可してください」というヴィスタ高校二年生のマイケル・フィグリーの意見もあった。

最後に、肝心の委員たちがそれぞれコメントした。委員長ホリデイは「科学の時間における創造科学の問題は

すでに我々の手から離れています。私はこの学校区の科学カリキュラムを変えるつもりはありません。つまり、進化論と同等に創造論を教えるつもりはありません」と明言した。ジョイス・リー委員は「創造科学」を正しいと信じているが、それを「他人に押しつけようと思ったことは一度もありません」と発言した。

しかし創造論を支持するもう一人のキリスト教ファンダメンタリスト委員のティンダルは「子どもたちに科学的方法と批判思考を教えることに賛成します。科学の教室で神学を教えることはできません。しかし証拠についての批判思考は必要です。それさえあれば、科学をドグマとして受け入れなくてすむからです」と述べたあと、「批判思考」の一つとして「インテリジェント・デザイン」説を教えるべきだと提案した。しかしこの宇宙はある知的な存在によって設計されたと考える「インテリジェント・デザイン」説は、明らかに「キリスト教的思考」である。

他方、穏健派のカーター委員は「私は創造と進化の折衷論を信じています。しかしそれを教えるつもりはありません」と話した。同じく穏健派のローズ委員は「裁判所は創造科学が科学の時間にはいる余地はないと言っています。もし科学の時間にそれを教えれば、この学校区は訴訟にまきこまれるでしょう。しかしこの学校区には訴訟をまかなうだけの費用がありません。ただし、哲学の時間にそれを教えること、またヴィスタ高校の学生が示唆したようなランチタイム・デイベイトには反対しません」と述べた。

結局、委員会は全体として、創造論を科学のカリキュラムに入れるつもりはないと答えた。

次にこの学校区で顧問弁護士を新たに四人雇うという議題に入った。これら四人はすべてオペレーション・レスキューのメンバーである。つまり、プロライフ運動をはじめとする宗教的右派の価値を擁護するため、それに反する教育をおこなう学校を訴えることを仕事としている弁護士である。

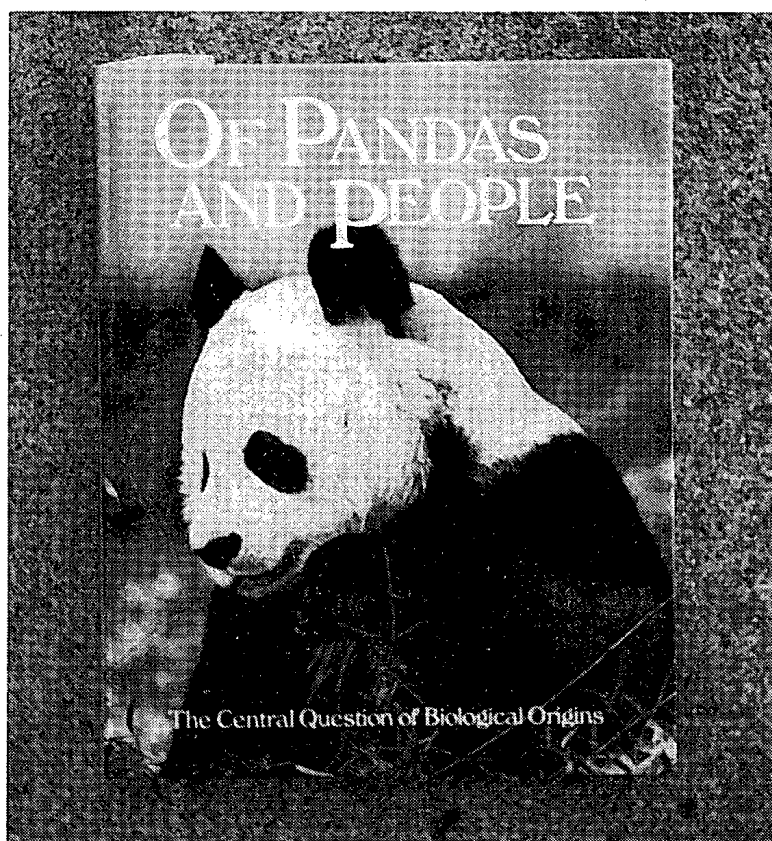
多くの人が顧問弁護士を雇う提案を批判し、議論の末、この動議は委員会自身によって破棄された。もし弁護士
の予算をとれば、子どもたちは雨漏りの校舎で本もない教育に甘んじなければならなくなる。こんなことを納税者
である市民が認めるはずはなかった。

第三に、月例会をプレーヤー（祈祷）で始めるべきか否かという動議がもちあがった。まず一五人のスピーカーが
その動議をとりあげるべきかどうかについていろいろな意見を述べた。たとえば、リン・ラムは「その提案はこの
地区に宗教を持ち込もうとするホリデイの意図をあらわしている」と言い、人前で祈祷するのは「偽善者」だとい
うマタイ六五章七節をひいた。しかし大半のスピーカーたちは祈祷の力をたたえ、「六〇年代に宗教が学校から追
放されてから、少年犯罪が急増した」という事実を指摘した。ティンダル委員長は祈祷に賛成し、「神の助けと祝
福を求めることはこの社会に団結をもたらす」と述べ、祈祷の効果を力説した。

祈祷の違法性について質問が集中するなか、カーター委員は自分の意見を保留した。委員会は全体会議を祈祷で
はじめることに憲法上の問題がないかどうか、現在の顧問弁護士に諮問することにした。結局、この提案は二月の
全体会議で可決されることになる。

(3) 一九九二年五月科学教科書選定委員会

三月初旬、ティンダル委員がサイエンス・カリキュラム・レビュー委員会に『パンダとヒト Of Pandas and
People: The Central Question of Biological Origins』という題の一九八九年の本（次頁の写真）を高校科学カリキュラ
ムの副読本として検討するように依頼した。筆者はサンフランシスコ州立大学のデイーン・ケニヨンとヒルズボ



『パンダとヒト』

ロー・コミュニティ・カレッジ（フロリダ州タンパ）のパーシヴァル・デイヴィスである。ダラスの出版社によると、一九八九年の出版以来、この本は一二、〇〇〇冊売れたが、正式に採用する学校区はなかったという。教科書について州採用システムをとるカリフォルニア州教育委員会でも、もちろんそれは認められていない。なにしろ創造論教育を意図するものとして、この本は科学者や教員から総攻撃を浴びていたからである。^{*2}

他方ティンダル委員によると、この本は「進化のラ
ンダム・ミューテーション理論を否定するもので、あ
る知的な力が偶然ではなく計画的に生命を作り出した
と仮定するインテリジェント・デザイン説」を提唱し
ているのであって、創造論や神学と無関係なのだとい
う。

学校区カリキュラム委員会は幼稚園から第八学年までのカリキュラムと科学教科書を調査し、その推薦を四月一
五日に教育委員会に提出することになっていた。カリキュラム委員会のもとで教科書委員会はただちにこの本の審
査を始めた。

一九九三年五月四日ティンダルの要求に応じて、教科書選定委員会（五人）はこの本について次のような評価を下した。その内容は非科学的で、その前提は事実と仮説に基づく論理構成から著しく逸脱している。したがってこの本を科学カリキュラムに導入する理由はまったくない、と。教科書委員会によってこの結論は学校区の中等教育の科学コースを調査している科学カリキュラム委員会に上申され、そこからさらに学校区の教育長に上申された。しかし教科書選定委員会から明確な否定回答が出たにもかかわらず、創造論教育に反対する人々は安心できなかった。教育委員会には依然としてこの本を学校カリキュラムに含めるべきだと推薦できる職権があったからである。結局、推薦されることはなかったが、この時点ではまだ予断を許さなかったのである。

（４）一九九三年五月二〇日教育委員会全体会議

この日、五〇〇人以上のヴィスタ市民が集まった。主催者側の予想をはるかに超える聴衆を收容するため、会場が別の体育館に移された。これだけの人数が集まったのは、キリスト教ファンダメンタリスト委員が実現しようとする「方針第六〇一九号」を阻止するためだった。創造論教育に反対する人びとの目にはこの提案が教会と国家の障壁を破る手段に見えた。実現しなかった「参考図書『パンダとヒト』」に続いて、キリスト教の教義を公立学校の教室に持ち込むための第二の策略として映ったのである。

それではホリデイとティンダルの両委員が提案した委員会方針第六〇一九号「科学の教え方について」をみることにしよう。それは中等教育科学カリキュラムの変更を意味するが、その要旨は次の三点からなる。

A いかなる科学理論もドグマとして教えられるべきではない。いかなる生徒にもカリキュラムで提示される理論を強制的に信じこませられたり、受けいれさせられてはならない。ドグマとは科学的なテストや反論を受けない信仰体系をさす。

B 科学的な探究心と対話を促進するために、科学の時間には理論に挑戦する科学的証拠が提示されるべきである。

C 神の創造、究極の目的、あるいは究極の原因 (The Why) の議論は歴史・社会科学そして／または英語のカリキュラムの適切な時期にふくめられるべきである。^{*3}

親、カレッジ教授、高校教員、学生などおよそ四〇人が発言台に立ち、「方針第六〇一九号」についてそれぞれ二分間の演説をした。ある高校教員は、「委員の方々はウソをついている。そのウソをイエス・キリストの福音で隠して、お金を集めようとしている」と非難した。すると「方針」の支持者のヤジがとぶ。ある創造論支持者は「新しい宗教（進化論のこと）がある。それが私たちの国を運営している。それが私たちの子どもたちをダメにしている」と証言した。すると「方針」の支持者たちは歓声をあげた。さらに進化論は「ブードウ教の科学だ」という意見や、「もしクリストファー・コロンブスの時代にACLUが存在したならば、彼がアメリカ大陸を発見することはなかっただろう」という意見や、またセント・ヘレナ火山は「地形が数日間が変わりうる証拠だ」から創世記の記述は正しい^{*4}などという突飛な意見も飛び出した。「創造論にかんする公立学校の騒ぎでこの町の不動産価格が下がってしまった」という、きわめてカリフォルニア的な悲観論も出たという。

こんな議論は時間の無駄だと思う人が多数いたにもかかわらず、討論は三時間も続いた。その結果、委員は用語を少しだけ変更し、「方針第六〇一九号」を委員会へ上申した。委員会はいずれこの提案を決議するつもりだった。ホリデイ委員長は報道に対し、この方針はまったく公約違反にならない、それどころか科学教育を活性化させるだろうと強気の状態を見せた(ちなみに彼女は、学校カリキュラムの決定に影響力をふるう保守的政治活動集団ナショナル・アソシエーション・オブ・クリスチャン・エジュケーション National Association of Christian Education の会員である)。

カーター委員はこの方針に反対意見を述べた。「これは必要のない方針だ。教員に数学の教え方、社会科の教え方、外国語の教え方を命令する方針など余計なことだ。しかし最大の関心事は、この委員会のきわめて政治的な姿勢が訴訟につながり、納税者によってまかなわれる高給弁護士採用につながらないかどうかということである」と説明し、むしろ将来予想される最悪の事態への懸念をあらわにした。

ナショナル・センター・フォア・サイエンス・エジュケーション(カリフォルニア州エル・セリト市)所長のユージニー・スコット博士(次頁の写真)はこの方針について反対の立場から、次のような抗議文を用意した。

この方針には大きな欠陥があります。それは創造論者に共通する長年の誤解です。創造論は「どのようにして進化が起こるのか」についての論争を「進化が起こるのか否か」という論争と混同しています……。確かに進化の過程については、「ゆっくり」、「速い」、「突然」などの論争がありますが、これは「進化が起こったかどうか」についての議論ではありません。このような混同が委員会の方針にも見られます……。この方針が



オフィスのスコット博士

なくとも、有能な教師は科学の時間に競合する理論に論争の余地があることを示すでしょう。したがってこの方針は蛇足であり、これについて議論したり、ましてそれを成立させるのは時間の無駄です。それどころか、もし成立させれば委員会は訴訟を覚悟しなければならぬでしょう。この方針が対象としているのは、すべての科学ではなく進化論です。その理由が進化論に対する宗教的な反対であることは明らかです。その種の裁判結果については、これまでの判例から明らかです。「エッパソンVSアーカンソー州その他」の多くの判例が示しているように、進化論をこのように扱うことは許されません。裁判に負けるとわかっていながら、この方針を成立させることはできないと思います。

ちなみにティンダル委員が『パンダとヒト』を推薦したときにも、彼女はその本の批判文を教育委員会に寄せている。

他方、創造論教育に反対の立場をとるヴィスタ教員組合長トム・コンリーは新聞インタビューにこたえて、「論

争がこの町を活気づかせたという点でホリデイは正しいし、この学校区が全国から注目されているという事実も必ずしも悪いことではない。しかし教員にとって最大の問題は、混乱する親がますます増えていくこと、教員自身も何を教えるべきかわからなくなるということだ」と述べ、大きな懸念を表明した。

さらにもしこれらの方針が採択されれば、教師は生物進化論の弱点を示さなければならなくなる。ランチョー・ブエナ・ヴィスタ高校科学科の主任教員ジョルジャ・オースティンは新聞インタビューにこたえて、「こんな急激なカリキュラム変更は法的に無理だと思う。私はそんなことは教えられない。私たちは科学者として理論を支持する物理的な証拠を探すものだが、創造論にかんするかぎり、内的な信仰体系以外になんの証拠もみつからないのだ」と述べ、科学の授業で創造論を教えるくらいなら、教職をやめるとさえ断言した。

彼が教鞭をとるランチョー・ブエナ・ヴィスタ高校は、一九九一年のブルー・リボン賞や同年の第二位の模範的社会研究賞などの受賞が示すように、カリフォルニア州でも最高の高校の一つである。ある全国誌がカリフォルニア州でトップ・テンの高校の一つに数えたこともある。同校校長アラン・ジョンソンは、「新しい委員会をとりまく大騒ぎは深い亀裂を生み、注目すべきすべての業績をだいなしにしてしまった」と嘆いた。

この問題でヴィスタの世論も真つ二つに分かれた。中学校に通う一三歳の娘をもつバーバラ・ドノヴァンは公立学校に創造論教育の道を開く新方針にきわめて憤慨した。「教育委員会の動向には目を光らせなければいけないと思っっている。だけど教育委員会を見張るような生活は続けたくない。私には妻として母親としての生活があるからだ。おそらく、私たちを守ってくれる法律があるはずだ」と新聞インタビューにこたえ、訴訟をほのめかした。他方、三人の子どもをヴィスタの学校に通わせているマリリン・クック（四七歳）は、「創造論を導入しようとする

委員の主張は正しいわ。学校でキリスト教徒を作り出すのを恐れて創造論を閉め出すのは、馬鹿げているわ。進化論を教えて無神論者を作り出すのと同じなんだから」と述べ、新方針支持のコメントを残した。

(5) 一九九三年八月の教育委員会全体会議

この日も、三〇〇人以上が会場に集まった。ヴィスタ教育委員会は委員会方針第六〇一九号「科学の教え方について」を三対二の評決で採択した。大胆にも委員会は創造論教育を要求し進化論教育を弱める方針を宣言したのである。

この方針のもとで、教員は今まで通りに生物進化論を教えることはできなくなっただけでなく、生物進化論の批判をカバーし、歴史や文学の時間に創造論を教えなければならなくなった。多くの教員はこの新しい条件に反対しながらも、反対すればするほど自分たちの無力感を感じるだけだった。九五〇人の組合員を率いるヴィスタ教員組合長のトム・コンリーは新聞インタビューにこたえて、「彼らの意図は公立学校での生物進化論を破壊することだ。教員はこの学校のカリキュラムに急激な変化が起こるのではないかと心配している」と強い口調で語った。

さらにキリスト教ファンダメンタリストの三委員は性教育の方針変更を提案した。現行の方針では『ヴァリエーションズ・アンド・チョイスイズ』というテキストを使用している。そこにはコンドームの使い方をはじめ避妊方法はもちろん同性愛やマスターベーションなどについてもある程度詳しく説明されている。ところが三人組にとってこの現行のプログラムは教師が密室で生徒に「セーフ・セックス」をすすめているのに等しいものだった。彼らはまず「授業参観」という形で親のチェックを認めるよう提案したのである。ところが教員などそれに反対する人たちに

とって、この提案は性教育破壊の第一歩として映ったのである。「科学の教え方について」を強引に採択したあとだけに、両者の対立は今度こそ決定的となった。

最悪の事態を避けるため、区教育長リーニー・タウンゼントは仲裁案として祈祷問題、創造論教育問題、そして性教育問題を話し合うための「タスク・フォース」委員会の設立を提案した。おそらくそれは両者が共通の土俵を見いだす最後のチャンスだったのかもしれない。キリスト教ファンダメンタリスト委員は教員やリベラルな市民グループの要求を無視して、これまで祈祷の導入、創造論教育の導入と二度までも強引な決定を敢行してきた。三度目はないとタウンゼントは考えたのである。もちろんこの対立を収拾できなければ、彼女自身、区教育長としての能力を問われることになる。まさに進退かけての提案だった。しかし努力の甲斐なく、続く九月の教育委員会で彼女の仲裁案は否決されることになる。三人組は「タスク・フォース」の必要を頑として認めなかった。これで対話の場はもちろん、対話を提案できる人もいなくなってしまったのである。

自分たちで解決できなければ、問題は法廷にあずけるしかない。「方針第六〇一九号」に反対票を投じたサンデイー・カーター委員は新聞インタビューにこたえて、「創造論教育は違法です。私たちは訴えられるでしょう」と述べた。ACLUは、もし教員が現実に創造論や他の宗教に基づいた理論を教室で教えるならば、その方針を覆すために訴訟を起こすと宣言した。アメリカンズ・ユナイテッド・フォア・セパレイション・オブ・チャーチ・アンド・ステイトAmericans United for Separation of Church and Stateのスポークスマンのロバート・ボストンは「私たちはヴィスタの事態を深刻に受けとめている」と訴訟の可能性をほめかした。ヴィスタ市民の中には教育委員会に対するリコール運動を始めると公言する者まで出てきて、町の雰囲気はしだいに険悪さをおびてきた。

(6) 対立激化、リコール、そして新生教育委員会

ヴィスタ教育委員会がファンダメンタリストに牛耳られてから一年が過ぎた。一九九三年一二月の全体会議で、ホリデイ委員にかわりティンダル委員が委員長に選出された。あらためてキリスト教ファンダメンタリスト委員のなかから委員長を選出したことは、三人組が妥協することなく懸案の性教育の方針変更をまっとうする意思のあらわれであった。

この非妥協的な態度に我慢できなくなった反対派の人びとは、一九九四年一月一四日ついに、キリスト教ファンダメンタリストの三委員を対象とした「六月リコール選挙」請求運動を開始したのである。

しかしリコール運動はそう簡単に実施できるものではない。第一にその実施には、二か月ほどで対象者一人につき有権者の一五パーセントにあたる九、一五〇名の署名を集めなければならない。また、署名の確認作業に三万ドル、リコール選挙に三万五千ドルもかかるという実施費用の問題が市民に消極的な態度をとらせることも予想された。

こうしたマイナス要因が働いたのか、最初のうち署名の集まりが芳しくなかった。また、三人組支持者による署名の妨害運動があったという。たとえばもつとも人の集まるスーパーマーケットでは、店主が入口での署名運動を拒否して、駐車場で小競り合いが起きたりした。ラジオのディスクジョッキーが放送で「ユウレイ」署名を呼びかけることもあったという。

結局六月に実施できなくなったリコール運動は、目標を十一月実施に変えて出直すことになった。それでも六月二二日までに集めなければならぬ署名数に変わりはない署名数に変わりはなかったが、リコール対象者は十一月の中間選挙のさい非改選のリー委員とティンダル委員の二名となった。ホリデイ委員は十一月に改選を迎えるので、リコール対象から自

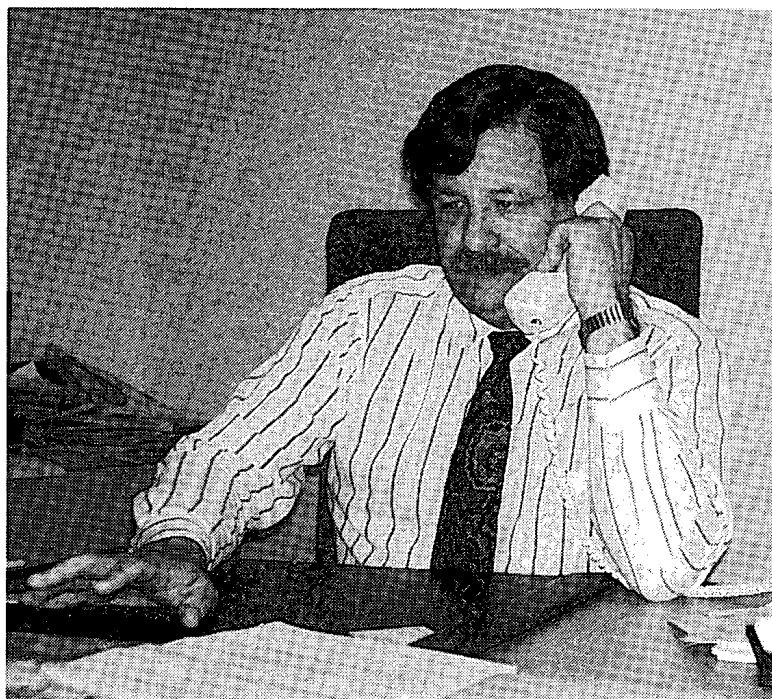
動的にはずされている。しかし二月の時点で集まった署名数はまだ六、〇〇〇名にすぎなかった。

この間、キリスト教ファンダメンタリスト委員は性教育プログラムの方針変更を着々と進め、二月には具体的な変更を提案した。それまで使われていたテキスト『ヴァリユーズ・アンド・チョイスイズ』に変えて、『セックス・リスペクト』をテキストに選ぶという提案である。後者のテキストでは、結婚までセックスは控えるべきだという貞操教育が大原則とされ、避妊方法や同性愛やマスターベーションにかんする記述はほとんど削除されている。

それだけではない。困ったことに、この本のなかには人種差別や性差別を示す内容が書かれている。たとえば、性行動のチョイスを与えられると、つねに正しい行動、つまり禁欲的な行動をとるのは白人の子どもたちで、性的に活発な行動を示すのは黒人や他の少数民族の子どもたちだという。また性の責任を委ねられているのは女子であり、男子は自分の欲求を抑えることができないので、女子はつねに正しい行動をとれるようにしておかなければならない、と。こうした内容を正しいこととしてそのまま教えれば、もちろん憲法や州法に触れることになる。

三月の全体会議でキリスト教ファンダメンタリストの三委員はまずサクラメントの弁護士デイヴィッド・リユーウェリンを（時給一二五ドルで）雇うことを決めた。彼はさきの委員会方針第六〇一九号「科学の教え方について」の草案を作り、巧妙に創造論の導入の道を開いた弁護士である。『セックス・リスペクト』の採用を決めたあと、委員会は同弁護士に州法に触れることなくそのテキストを使用するための方法を検討させることにした。

さらに五月の全体会議では、性教育にかんする新方針を提案した。「第五から第九学年の教室では、同性愛、マスターベーションの議論を一切禁止し、第一一学年の保健の授業では避妊方法の教育を禁止」した。六月には、『セックス・リスペクト』を第六学年で次年度から採用することを正式に決定している。これによって、今まで積み上



オフィスのトム・コンリー氏



ピーター・ウェルチ氏とスティーブ・グロンク氏

げてきた性教育が完全に骨抜きにされてしまうことになったのである。

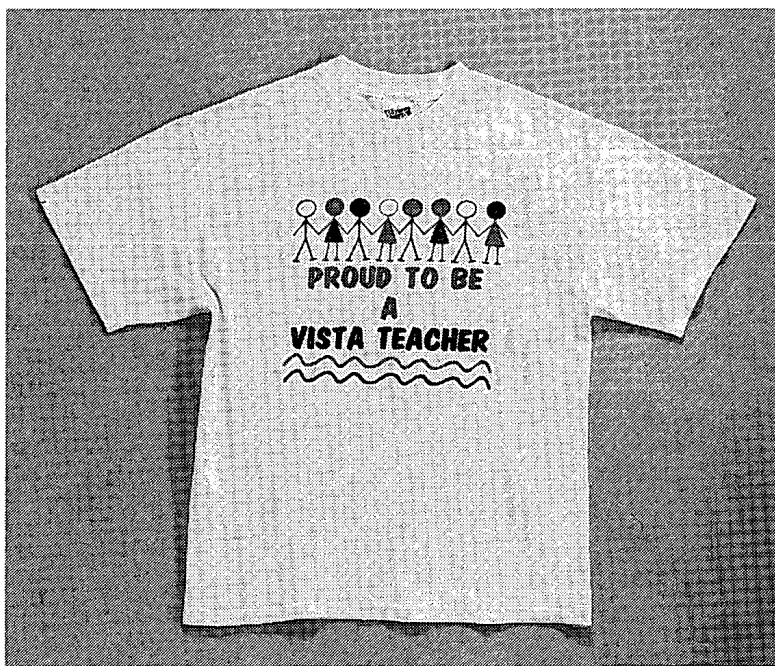
こうした強引な委員会運営に対し、四月ヴィスタ教員組合はついにリコール運動支援を決定した。それまでは、教員が特定の政治勢力を支援するのは好ましくないと考え、自重してきた。しかし委員会の非妥協的態度にこのままではまともな教育ができなくなると判断したのだ。実際には以前からリコール運動に資金と人員を投じていたの

だが、支援決定を契機に公然と活動を開始したのである。

組合会長のトム・コンリー（前頁上の写真）のもとで二、三人の幹部（前頁下の写真）から指令を受けた各公立学校の組合員が教員をとりまとめ、メール・ボックスにビラを配り、「ブラウド・トゥ・ビ・ア・ヴィスタ・ティーチャー」とプリントされたティーシャツ（上の写真）を着て街頭に立つなど、大々的なキャンペーンを開始した。

一二月の選挙に向けてリベラル、保守の両方から立候補を表明する者が出てきた。しかし穏健派のカーター委員はこうした対立に嫌気がさし、六月、早々と不出場を表明した。また同月、区教育長のタウンゼンドが辞意を表明し、この学校区から去っていった。そのあとさらに三人の教育行政官が去った。ヴィスタ統合学校区は対立を調整できる最後の人物を失い、区教育長のいない学校区となってしまったのである。見捨てる行政官がほかにも出るのは当然の結果であった。

七月一日、選挙管理委員会は一二月の中間選挙のさいに教育委員の改選選挙と同時にリコール選挙を実施すると発表した。署名運動については主催者側によると、リー委員とティンダル委員のそれぞれに対し一一、〇〇〇以上の署名が集まったという。ところが確認してみると、有効署名数は規定ぎりぎりしかなく、か



ティーシャツ

なりの「ユウレイ」署名がふくまれていたらしい。

この時期には立候補の顔ぶれがでそろった。リコールが成立した場合、補欠選挙も同時に行われるので、ティンダル委員の議席に対してはデイヴィッド・ハッバードが立候補を表明し、八月にはリー委員の議席に対してバーバラ・ドノバンが立候補を表明した。意外なことに、今度改選にあたるホリデイ委員は不出場を表明した。九月にはヴィスタ教員組合がジェニファー・ヴァーヴィンク（教師かつ牧師）とランス・ヴォルマー（不動産屋）を公認候補とした。

そして十一月八日、選挙の結果^{*}リー委員とティンダル委員はリコールされた。票の内訳は次の通りである。リコール選挙では登録有権者の五九%が投票した。そのうちの五四%がティンダルのリコールに賛成し、六五%がティンダルの残りの二年間にデイヴィッド・ハッバード（弁護士、リベラル）を選んだ。また、五五%の人がジョイス・リーのリコールに賛成し、六八%の人が彼女の残りの任期にバーバラ・ドノバンを選んだ。また改選選挙では、ヴィスタ教員組合公認のジェニファー・ヴァーヴィンクとランス・ヴォルマーが当選した。

こうしてキリスト教ファンダメンタリストは一掃され、彼らによる教育委員会乗っ取りはわずか二年であっけなく幕を閉じ、ふたたび穏健派が委員会を運営していくことになったのである。

一九九四年二月七日、ヴィスタ統合学校区の新生教育委員会は最初の委員会全体会議を開いている。最初の決議は共通の土俵として「タスク・フォース」をつくり、宗教のあり方についてのガイドラインを作ることになった。皮肉なことに前の教育長リーニー・タウンゼントが辞任したのは、この同じ提案が否決されたためであった。この提案に対し場内には強い賛成も反対もなく、ほとんど議論もなく全会一致で承認された。「タスク・フォース」は

この学区のいろいろな宗教グループ、エスニスイティー、ゲイなどのマイノリティー・グループからの代表で構成されることになった。このとき全体会議の参加者は五〇人ほどで、二年前とは比べものにならないくらい静かだったという。

ヴィスタはすでに対立の傷を癒す時期を迎えていたのである。^{*6}

四 ヴィスタが示すこと

(1) 小さな町の大きな対立

さてヴィスタという小さな町の争いをみることで、現在のアメリカの公教育がかかえる全国的な問題をとらえることができる。たしかに暴力、拳銃、ドラッグ、エイズ、レイプ、未婚の母の増加など、アメリカの公立学校が荒れずさんでいることはよく知られている。しかも学校当局が実施している警官の配置、ボディ・チェックの慣行、コンドームの自動販売機設置、性教育などの対応策は、残念ながら、改善の決め手とはなっていない。もちろんこれこそアメリカの公教育がかかえるもつとも深刻な事態であるが、本論の問題は別にある。

本論のテーマはむしろ、この憂慮すべき事態について独自の原因論や解決策を展開するキリスト教ファンダメンタリストの人たちが反対派とのあいだで大きな摩擦を引き起こしているという問題である。

キリスト教ファンダメンタリストによると、公立学校の荒廃のおもな原因はキリスト教道徳教育の廃止、生物進化論教育、性教育、そしてそれらによる子どもたちの聖書離れだという。実際一九六二年の最高裁判決は、公立学校がキリスト教に則った祈祷をおこなうことを禁止した。さらに一九六三年には公立学校で聖書講読の授業をする

ことも禁止した。そしてこれによって生じるカリキュラムの隙間を埋めたものは、生物進化論であり性教育の科目であった。とくに生物進化論は旧約聖書の「創世記」が説く神による創造を否定するという意味で、子どもたちの聖書離れにもっとも貢献したという。それはまさに『聖書』の土台を崩す諸悪の根源なのだ。

したがって、彼らはキリスト教教育を復活し、生物進化論教育を廃止し、性教育を「改善」すれば、公立学校の荒廃を解決できると考えている。祈祷や聖書講読の時間を復活させれば、「キリスト教的道徳教育が青少年の非行を抑制」してくれるというのが彼らの理屈だ。「生物進化論教育」をふくむ科学教育を犠牲にすることなど何でもない。そこには子どもを少しでも安全な学校へ通わせたいという親の強い気持ちが働いている。

また、彼らは公立学校には自分たちと同じ信念を教育する場所になってほしいと思っている。現実には、親の税金で運営される公立学校は子どもに親の信条（創造論）を否定する理論（生物進化論）を教え性教育を実施し子どもたちを悪に導いている。そんなばかばかしいことをするために税金を払っているのではない、というのが彼らの言い分だ。彼らはこの矛盾に耐えきれなくなっている。

このように、アメリカの小さな町ではどこでも公立学校におけるキリスト教道徳教育の復活と生物進化論教育や進歩的性教育の廃止を望む親がいる。同時に彼らに対抗し、科学教育や現行の性教育を守ろうとする親たちもいる。したがってどんな小さな町も大なり小なり、両者のあいだの対立をかかえている。

しかも共和党、民主党につながる全国組織が介入してくるので、この小さな対立はつねに「保守VSリベラル」の対立の最前線にもなる。創造論運動の主張は共和党右派の主張に近く、進化論教育や現行の性教育を支持するのは民主党である。公立学校で創造論、進化論のどちらを教育するかは、両党どちらの価値観を教えるかという問題に

等しい。その意味で、この対立は将来の黨員や支持者を確保するための熾烈な戦いにもなっている。

(2) キリスト教ファンダメンタリストによる教育委員会乗っ取り

この対立が展開される場所は、学校区の予算の配分・執行、カリキュラム編成、テキスト採用を職務とする教育委員会である。ここは、キリスト教ファンダメンタリストにとっては教育内容を「改善」するための重要な機関であり、教員を中心とするリベラル勢力にとっては給与やノルマなど待遇を決める重要な機関である。したがって、委員の政治志向や宗教はどちらにとっても重要である。ここを支配することで、どちらも自分の方針を区の教育行政に反映させることができるのだ。このように教育委員会は本質的に両者の利害が衝突する政治闘争の場である。

たしかにキリスト教ファンダメンタリストの考え方を支持する人たちが圧倒的に多い町では、対立はおそらく表面化しないであろう。区教育長、教育委員、教員のほとんどが創造論を支持しているからである。誰が教育委員になっても、委員と教員はたがいに協力して委員会を運営していくことができる。そこに新任の教員が入り込んで生物進化論を教えようとしても、周囲の反対に圧殺され、「どうしても教えたいのならほかの町へ行ってくれ」と忠告されるだけである。実際、対立が見えないほど同質的な町はミネソタ、アイオワなどの中西部の州に多くあるという。逆にリベラル勢力が委員会を支配している場合も、教育委員と教員とがなれ合いで委員会を運営するため、対立はあまり見えないことが多い。

しかしそういう対立の見えにくい学校区であっても、地方選挙の時期には必ず対立が表面化する。このとき、政治闘争の場として教育委員会の本質が露呈するのである。どちらの陣営にとっても、教育委員会は教育行政を思い

通りにするための絶好のターゲットである。

ヴィスタ統合学校区の場合、保守的な人たちが多いという事情を考慮しても、もともとリベラルな人たちが教育委員会を運営してきた町である。それにもかかわらず地方選挙のさいに教育委員会がいつも簡単にキリスト教ファンダメンタリストに乗っ取られた。^{*}この事實は、他の小さな町に対して大きな意味をもつ。つまり、どこの町の教育委員会もヴィスタ統合学校区と同じように、いつでもキリスト教ファンダメンタリストに支配されるといふ可能性を示している。たとえしつかりしたりベラル勢力が教育委員会を運営している町であっても、決して安心できないことを意味しているのである。

さらに、ヴィスタの経験は教育委員と教員が対立する教育委員会の運営がパニック状態に陥ることを示している。そもそも問題は、科学教育の中身をどう決めるかということだった。それを決めるのは科学の権威、司法の判断、あるいは教育的配慮であったろう。しかし学問や司法の中心から遠く離れた田舎町ヴィスタでそれを決めたのは、怒号、ヤジ、数のパワーだけだった。この二年、ヴィスタ統合学校区の教育委員会が正常な機能を果たしたとはとうてい考えられない。言うまでもなく、その責任はもとより両陣営にある。

(3) キリスト教ファンダメンタリストのステルス・アタック

教育委員会を牛耳ることに成功したあと、キリスト教ファンダメンタリスト委員が繰り出した方針はむしろわかりやすいものだった。公立学校での実施を睨んだ教育委員会全体会議での祈祷の再制度化、二カ国語教育プログラムや性教育プログラムの解体、創造論教育の実施などは選挙前の公約から予想できる範囲にあった。

ただし、キリスト教ファンダメンタリスト委員の最初の提案が顧問弁護士を四人雇うことだったのは予想外であった。しかし彼らの提案は結果として訴訟につながるおそれがあったことや、ACLUやリベラルな市民グループが選挙直後から訴訟の脅しをかけていたことを考えあわせると、告訴に備えて有能な弁護士を確保しておきたかったという彼らの意図もわからないではない。財政的な理由により否決されたが、これは彼らが訴訟を覚悟していたことを示す提案であった。

提案の内容には目新しいものがなかったとしても、提案の方法には注目すべき点があった。それは教育委員会におけるティンダル氏の発言に顕著にあらわれていた。創造論のテキスト『パンダとヒト』の導入を提案したときや、「インテリジェント・デザイン」説を推薦したとき、彼は「キリスト教、神、創造」という言葉をいっさい使わなかった*。そこには正面攻撃を避けることで抵抗をかわそうという意図がうかがわれる。実際マスコミからは「正体を隠したまま創造論導入をはかろうとした」と受けとられ、ステルス・アタックだと揶揄されている。

また創造論教育導入のための方針六〇一九号の提案にも、同じような器用さがみられた。これまで創造論者たちは創造論を公立学校の正門から教室に持ち込もうとして、失敗してきた。つまり、科学の時間に進化論批判と創造論教育の両方を同時に実現しようとしたのだが、後者は憲法に抵触すると判断され、どちらの目的も達成できずにいたのである。

ところが今回の方針はこの二つの目的を切り離し、科学の時間には進化論批判だけを実施し、科学以外の時間に創造論教育を実施することを提案していた。つまり、科学の時間の創造論教育を禁止した州教育方針や司法規定との衝突を巧妙にかわしているのである。カリフォルニア州は科学以外の時間に「適切」な創造理論を教えることを

禁じていない。学校の事務方の話でも、比較宗教学や文学の一部としてならばこの方針は創造論教育を問題なく実現させるという。その巧妙さには法律専門家のアドバイスの跡が感じられるが、じつさいに草案をつくったのは、サクラメントの弁護士デイヴィッド・リユーウエリンだった。彼はカリフォルニア州で保守的キリスト教の大義を弁護する法の専門家である。

キリスト教ファンダメンタリスト委員は初期の教育委員会全体会議で「科学として創造論教育を導入するつもりはない」と約束していた。もちろんその約束は守られている。しかしその真意は「科学以外の時間に導入する」という意味だったことがこのとき明らかになった。規制の間隙をぬって、いわば裏口から創造論を教室へ持ち込むことに成功したといつてよい。

(4) 地元リベラル勢力による抵抗と限界

こうした一連の方針変更に対し、反対派は手をこまねいてみていたわけではない。彼らは市民組織をつくり、外部の団体とも協力してキリスト教ファンダメンタリスト委員の暴走をくい止めようとしたのである。たとえば、市民によるコミュニティ・コアリション・ネットワークCommunity Coalition Networkやバーバラ・ドノヴァン(次頁の写真)率いるコミュニティ・アクション・フォーア・パブリック・エジュケーションCommunity Action for Public Education (通称CAPE)などの地元市民グループが選挙直後から結成され、バークレイにある全国科学教育センター(通称NCSE)と協力して、教育委員会の動向を監視しながら、訴訟をほめかすなど創造論教育反対キャンペーンを展開した。



新教育委員のバーバラ・ドノヴァン氏

こうした地元市民グループの活発な活動を示すエピソードがある。一連の騒ぎがおさまってからのことであるが、私はヴィスタ統合学校区の教育委員会全体会議に臨席したことがある。そのときはまさに「嵐の後」の静けさと言うほかないほど、出席者が少なかった。むりやり出された子どもたちが親のかたわらで宿題をしたり眠っていたりする、のどかな風景だった。したがって、一年前に五〇〇人以上の群衆が集まったときは、あきらかに両陣営からの動員があったのだ。とくに反対派による動員がいちじるしく、怒号、ヤジの多さには初めから冷静な審議などするつもりはなかったのではないかと思われる。これは、キリスト教ファンダメンタリスト委員

員の側からみれば、あきらかな委員会活動の妨害として映ったことだろう。こうした抵抗の強さはアメリカのすべての町に期待できるものではない。むしろヴィスタに固有の強みではないかと思われる。

しかし地元市民による抵抗には限界もあった。それは教育委員会の全体会議でたたかわされた討論のパターンに

みられた。最初に地元の科学者が発言する。進化論は認められた科学であり、論争は進化論の内側のものであり、進化自体は否定されていないことが市民に教えられ、加えて、創造論は科学でないことが強調される。次に、リベラルな牧師が出てきて、聖書を尊重するが聖書の教えを科学と混同することを戒める発言が続く。^{*10}これに対して、創造論者が進化論には証拠（化石）がない、したがって仮説である、それは創造論と同じであるという。しかし、実際には「創造論」という言葉をさけ、「インテリジェント・デザイン」説などという名前を使う。そして、学齢の子どもをもつ親がそれでは両方を教えて子どもに選ばせるのがよいというような「フェアプレイの精神に則った」発言が続く。さらには、学生代表が同じように両方学び討論したいとアピールすることもある。^{*11}

残念ながら、この種の議論では結論がでない。地元の科学者や理科の教員では役者不足なのか、彼らの発言にはあまり説得力がなく、かえってキリスト教ファンダメンタリストが招いた「創造科学者」に言い負かされることもある。じっさい彼らは隣のサントリー市にある創造研究所からこの問題の討論専門のスタッフを呼び寄せて、教育委員会の全体会議で発言させていた。これに対して、一流の科学者が田舎の小さな町にわざわざ足を運ぶことはま^{*12}ずない。

(5) 外部からの助っ人

したがって、反対派は全国科学教育センターのように創造論者との闘いを専門としている組織からの助っ人を必要とする。あるいはACLUのようなリベラル組織の協力も必要である。^{*13}そしてこうした外部組織の協力を得られるかどうか、教育委員会の動向を大きく左右するのである。

幸運にもヴィスタ統合学校区の場合、全国科学教育センター所長のユージニー・スコット博士が何度か足を運び、全体会議で発言している。また文書で情報を提供した。とくに、ティンダル委員が推薦した『パンダとヒト』やその本が主張する「インテリジェント・デザイン」説の批判的情報は役にたったらしい。地元の教員によると、ティンダル委員の説明はC（大文字のシー）で始まる言葉を隠した、いわゆるステルス・アタックだったから、それを見破るのにスコット博士のコメントが重要な役割を果たしたというのだ。

他方カリフォルニア州教育局の態度は、どちらの側から見ても一貫して消極的だった。州は『サイエンス・フレームワーク』（一九九〇）という州教育ガイドラインをもつ。そこでは、生物進化論が「科学界ではもはや重力と同じように論争の余地のないもの」で、宇宙の始まりにかんする「公認の説明」であると教えなければならないことになっている。さらに、科学の授業時間には宗教的ドグマを禁止すること、とくに「創造科学」は科学ではないと宣言することが方針として盛り込まれている。

しかしカリフォルニア州には公立学校における創造論教育を全面的に禁止する特定の州法はない。^{*14} 要するに、ガイドラインはしよせんガイドラインにすぎず、各学校区は自分のやりたいようにやるかもしれないという。カリフォルニア州では、創造論を歴史や社会科学のカリキュラムの一部として教えることは許されているので、ヴィスタ統合学校区が創造論を科学として教室に持ち込まないかぎり、州教育局は黙認するしかない、同局スポークスマンのスージー・ラングはいう。^{*15}

結果として、ヴィスタ統合学校区では創造論の科学教育導入を避けることはできた。それはまさにカリフォルニア州のガイドラインのおかげであった。しかし同時に、キリスト教ファンダメンタリスト委員は歴史や英語の時間

にそれを教えるという規定を採択し、全国に先がけて公教育への創造論導入を決議した。これもまたガイドラインの“おかげ”であるといえる。このように州当局は確固たる姿勢に欠けていたのである。

(6) 最後の切り札、教員組合による力の解決

ヴィスタ統合学校区の結末を決めたもつとも重要な組織は教員組合であった。この二年間委員会を思い通りに運営しようとした二人組の息の根を止めたのは、ヴィスタ教員組合（通称VTA）だった。

教員組合は命令系統の確立した全国組織である。ヴィスタ統合学校区の場合、ヴィスタ教員組合はカリフォルニア州教員組合California Teachers Association（通称、CTA）に統合され、CTAは全国教員組合National Education Association（通称、NEA）に統合される。周知のように、NEAは民主党内で最大勢力をほこるロビースト団体となっている。学校区の教員組合はその末端組織であり、中央から派遣された専従の組合員によって運営されている。ヴィスタ教員組合の組合長トム・コンリー氏は教員ではなく典型的なユニオン・マンである。

このヴィスタ教員組合はリコール選挙運動および教育委員選挙運動において決定的役割を果たした。まずキリスト教ファンダメンタリスト委員会を支持するグループ、シティズンズ・アドヴォケイティング・ステューデント・エクスセレンスCitizens Advocating Student Excellence（通称CASE）の妨害により署名運動が停滞したとき、VTAはなりふりかまわず豊富な資金とマンパワーを投じ、署名運動にラスト・スパートをかけた。勢い余って、教室内でも署名を集めるといふ違反まで起こした。しかしこのような愚挙を犯すとしても、VTAの参加がなければ、おそらくリコール運動は成立しなかったであろう。

また、教育委員選挙のさいにも大きな役割を果たしている。組合には豊富な選挙資金があった。組合は公認候補の資金援助のためにキャッシュと現品で二万ドル以上募金を集めた。さらにCTAも各公認候補に選挙資金を提供している。^{*16} 他方、CASEも公認候補（主婦メアリー・ブリストルと弁護士ロブ・ウォーカー）のために資金を集めたが、その金額は総額六、五〇〇ドルならずで、力の差は歴然としていた。

しかしヴィスタ教員組合の参加はリコールによる反対者一掃という暴力的な解決しかもたらさなかった。私が出席した教育委員会全体会議が平穩そのものだったのは、決して問題が解決されたからではなく、敵を排除し、仲間内だけで運営されていたからである。つまり、VTAの「解決」とは、民主的な雰囲気をもちながら対立する論点を議論し尽くすことではなく、教員組合と相性のよい委員によって運営される教育委員会にもどすことだったのである。そして、力と数による相手の排除という方法に終始した姿勢は、教員組合もキリスト教ファンダメンタリストも変わりはない。

(7) いつか、裁判

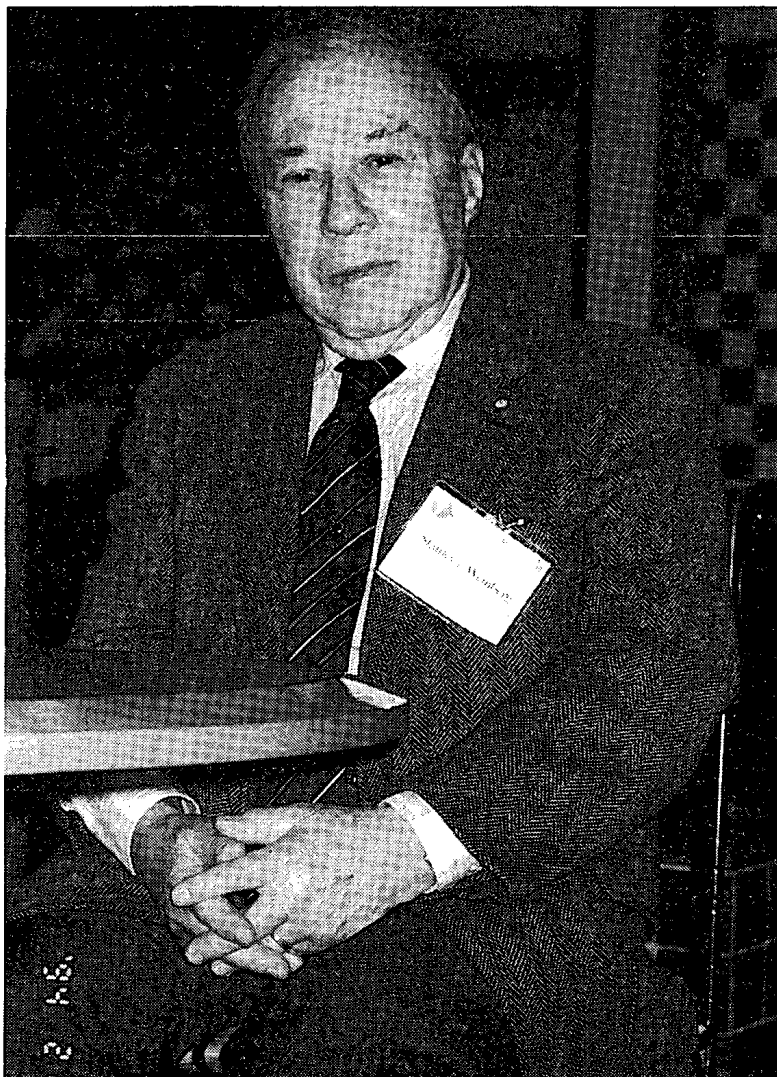
ヴィスタ統合学区が一応落ちついたあとも、全国科学教育センター所長スコット博士のもとには、各地から教育委員会を乗っ取ろうとするキリスト教ファンダメンタリストとの闘いかたについての問い合わせが殺到している。また創造論教育導入のための委員会方針の草案を作成したリユーウェリンによると、彼の組織Western Center for Law and Religious Freedomはカリフォルニアや西部の学区から創造論教育導入の方法について電話で問い合わせを受けているという。

しかしヴィスタの経験は手本として学ぶに値するものだろうか。たしかにヴィスタ教員組合長コンリー氏はインタビューの最初に「もう昔のことだ。今はまったく問題ない」と前置きした。この発言には二度とこんなことは起こさせないという勝者側の自信と決意が感じられた。そして「和解、調停、共通の土俵」などの標語を前面におしだし、できるだけ公平に教育委員会を運営していききたいのだと続けた。

しかし勝者中心の委員会運営で、深めた対立の溝を埋めることはできない。敗者の視点に立てば、問題は何一つ解決されていないのだ。リコールされた人たちの挫折感や疲れはいかに大きくとも、時間とともにそれは癒されるだろう。そのとき怨念がむくむくと頭をもたげるかもしれない。キリスト教ファンダメンタリストたちはいずれ再結成するにちがいないというマスコミ報道には、あながち嫉けただけだとすまされない現実味がある。結局ヴィスタの経験は対立を深めただけの反面教師にすぎないのではないか。私にはそう思えてしかたない。

たしかに最高裁は一九八七年に「宗教と国家の分離」原則に照らし、創造科学を宗教ドグマとみなし、「授業時間均等化」法とよばれたルイジアナ州法に違憲判決を下した。しかしこの最高裁判決が尊重されているならば、そもそもヴィスタでも事件は起こらなかったはずである。一九九〇年以降のカリフォルニア州だけでも、この起こるはずのない事件がたくさんある。たとえば、生物学の授業で創造論を教えて学生や父兄から苦情が出た大学教授の事件、裁判にまで発展した高校教師による事件など同様の事件がいくつかある。またテレビで創造論よりの番組が大企業のスポンサー・広告つきで堂々と放映されたこともある。^{*18}

創造論側の人たちは、最高裁判決などなかったかのように、創造論を公立学校の教室へ持ち込もうとしているが、彼らはそれを本質的にまちがっているとは思っていない。自分たちの子どもに教えることは自分たちで決めようと



スタンリー・ワインバーグ氏

しているにすぎないのだ。他方、進化論支持者は最高裁判決を無視する創造論側の態度に、費用のかさむ裁判に訴えない限り法律は自分たちを護ってくれない、あるいは自分で守るしかない、とクールにうけとめている。

しかもいつ裁判所から裏切られるかわからないと不安を募らせる人たちもいる。判決は時として世論の動向や政治的圧力に敏感になる。毎朝の礼拝や卒業式の賛美歌斉唱など公立学校での宗教儀式の復活を望む声や、そのための憲法修正を求める声もたかまりつつあるので、最高裁の態度もいつ変わるかかわらないというのである。両者にとって、さきの最高裁判決にいかほどの意味があるのだろうか。

この一種の無法状態のもとで、マスコミにはとりあげられないが、今でも毎日アメリカのどこかの小さな田舎町で小競り合いが「フレアー・アップ(出火)」している。しかしヴィスタの経験が示すように、今のアメリカには解決の決め手となる指針がないのである。そのため力による敵の排除という

方法に訴えるしかなく、そのたびに感情的対立が鬱積していく。これをくりかえせば、そのさきに待ちかまえてい
るものは、もっと大きな対立が引き起こすもっと大きな裁判しかないのだろう。

しかしこの問題はあと一度や二度の裁判でかたづくものだろうか。「もうかたづいた」と言い切るステイブン・
J・グールドとは対照的に、「あと二〇〇年はかかる」という全国科学教育センター(NCSE)の創始者スタン
リー・ワインバーグ(前頁の写真)の言葉が私の耳に重く響いている。

注

*1 現在アメリカに滞在している推定三四〇万人の不法移民のうち、四割強にあたる一六〇万人がカリフォルニア州に滞在する
といわれている。彼らの出身地はメキシコ、エルサルバドル、グアテマラなどの中南米およびフィリピンである。一九八六年
には新たに移民法(IRCA: Immigration Reform and Control Act)が制定されたが、不法移民はあとを絶たず、九〇年前後に
不法移民が一挙に増大し、とくに白人の中産階級が多く住むオレンジ・カウンティの町は雰囲気が一変し、犯罪が増大し、
財政が困窮し始めた。これに怒りと不安を感じた同地区の住民はSOS("Save Our State")委員会と協力し、不法移民とそ
の子どもにたいする行政サービスを制限する立法をめざして署名活動を始めた。カリフォルニア州憲法では住民提案という形
で住民が直接法を作る権利が保障されている。彼らの主張は不法移民とその子どもにたいする公的な教育、医療、社会福祉の
制限を規定するプロポジション一八七号として、一九九四年一月八日の中間選挙のさい投票にかけられることになった。住
民投票の結果、この住民提案は賛成(五九%、反対四一%)多数で可決された。しかし、この提案の合憲性をめぐる訴訟がお
こされ、九五年一月アメリカ地方裁判所は不法移民とその子どもにたいする公共サービスの否定などの移民政策は連邦政府
の問題であると判断している。

- *2 全米科学教育センター (The National Center for Science Education) から出版されている『創造論文献の書評』は科学教育にとってとくに「有害」と思われる創造論文献の、いわば、ブラックリストである。そこには販売部数の多い本や創造論者が公立学校のテキストとして推薦している本についての批判が集められており、執筆者にはステイブ・ブーン・J・グールドの名前もみえる。『パンダとヒト』については、マイケル・ルース、ケビン・パディアン、ジェラルド・スクーグが酷評している。
- *3 この三方針については若干の説明が必要だと思われる。第一の方針は、科学のいかなる理論も「教条的に」教えるべきではないし、いかなる科学理論も「強制」すべきではない」と要求している。もちろん科学理論とは進化論のことである。第二の方針は、進化論を疑問視することを眼目とする。説明に使われる化石記録が進化を証明するのに不十分であることを示す必要があるというのである。第三の方針は、科学の教室ではなくて歴史や文学のコースの「適切な時間」に「神の創造についての議論」を要求している。
- *4 創造研究所の「創造と地球の歴史」博物館には、重なり合った地層が短時間でできる証拠として、セント・ヘレナ火山の写真が噴火の経過説明つきで展示されている。おそらく、この意見を述べた人は創造研究所の関係者か博物館の展示を観た人だろう。
- *5 ちなみにこの選挙ではカリフォルニア州知事に保守派のピート・ウィルソンが再選され、上院議員にはやはり保守派のマイケル・ハフィンゲトンが当選している。また、不法移民の子どもたちに福祉サービスの提供を拒否する「プロポジション一八七号」については賛成が多数を占めた。前回の選挙でもそうだが、ヴィスタの結果はカリフォルニア全体と逆を行くようである。
- *6 私が対立に疲れたこの町を訪れたのは一九九五年三月、新教育委員会がスタートして四か月目の頃だった。わずか二日間の滞在だったが、今回の事件の主人公たちの何人かに面会することができた。また彼らの取りはからいで、教育委員会全体会議に臨席しその雰囲気接することができたのはとても幸運だった。それでも、訪問のタイミングとしては最悪の時期だったかもしれないと反省している。この二年間はどちら側にとっても思い出したくない忌まわしい過去である。とくにマスコミのさらしものにされたキリスト教ファンダメンタリストの三委員にとっては、もっともそっとしておいてほしい時期に私が訪問したのかもしれない。
- *7 一九九二年一月のヴィスタ統合学校区の教育委員選挙の数字をふりかえると、福音派の候補つまり創造論や人工中絶反対を唱えるキリスト教ファンダメンタリストが大勝したわけではない。むしろ各候補の投票率は一〇%台から七%台に近似して

いた。当選するため最低得票数は一六、七五六票で、キリスト教ボランティア・グループを動員すれば、この程度の得票はさほど難しくなかったという。もともとキリスト教色の濃い保守的な町であれば、当選者にとって選挙キャンペーンもかなり楽だったと思われる。一位、二位当選の二人はいずれもサザン・カリフォルニア・クリスチャン・タイムズ Southern California Christian Times とカリフォルニア・プロライフ・カウンシル California Pro-Life Council の公認候補で、実際この町の教会を中心とした選挙キャンペーンだけで当選したという。

*8 一括した文部省検定のある日本とちがひ、アメリカでは教科書や参考図書の採用方式は州によつてちがう。一般に、東部の州は末端の学区の教育委員会が決定する。カリフォルニア州やテキサス州では、かつてまだ人口が少なかった時代の名残として、州一括採用方式をとっている。これらの州では、生物進化論の記述の少ないテキストを選べばその効果は州全体におよぶので、他州に比較して創造論運動が強いといわれている。

カリフォルニア州では、各教育委員会が州採用の公認教材のなかから教科書や参考図書を選ぶ場合には、州はその購入にさし補助金を出す。逆に州は非公認の教科書の購入をほとんど援助しない。しかも一九八九年の『カリフォルニア州科学教育ガイドライン』で創造論関係の文献はいっさい削除されている。したがつて、ティンダル委員の推薦図書『パンダとヒト』のように、州採用にふくまれない図書を採用する場合、教育委員会はその費用を全額自己負担しなければならない。その負担はおよそ四〇〇、〇〇〇ドルに達するといわれた。すでに財政的に逼迫したヴィスタ統合学区には新たな教材のためにそれだけの資金をひねり出す余裕はなかった。この意味でも、『パンダとヒト』の採用は難しかったのである。

ただしもしこの本の採用が決まっていれば、この時点で訴訟が起こされていたにちがいない。新聞は予測として二人の専門家の意見を掲載した。エドワード・ラーソン(ジョージア大学教授、法律専門家)によると、「裁判所はその本のインテリジェント・デザイン説と創造論を同一物だというだろう。それでも個々の教員はその本を教えることができるだろう。なぜなら、もし教員の目的が科学を促進するものであるならば、教員には「科学に適切な」理論を教える「学問の自由」の権利があるからだ。しかし、教員の目的が宗教的信条を促進するものであるならば、教員はそうはできないだろう。したがつて、裁判所はその本を使うという決定の動機と実際の教え方を調べなければならないだろう」と説明し、さらに続けて「最初にその本を考慮するように要請したのがティンダルだったことは裁判においてキリスト教ファンダメンタリスト側にとって不利になるだろう。なぜなら彼は創造研究所につとめているからだ」と加えた。

他方、カリフォルニア大学バークレー校法学部のフィリップ・ジョンソン教授（犯罪法）はその本を支持して、「最高裁は最終的には研究の自由に関する立場を支持するだろう」といい、さらに「教員は科学に対する異なる哲学的アプローチを教えることができるだろうし、そうすべきであると彼らは言うだろう」と樂觀的な見通しを述べた。ちなみに、ジョンソン教授は、『ダーウィン・オン・トライアル』（一九九一）の著作や講演活動を通して、一九八七年の最高裁判決以降、求心力を失った創造論運動を再燃させようと精力的に活動している、ニューリーダーである。

ちなみに彼はNHK教育テレビの番組『英会話上級』に専門家として出演し、信じられないことだが、生物進化論の道徳的悪影響をとうとうと論じた（一九九五年一月一三、一四日）。そのとき、NHKは彼の立場や著作についていっさい論評を加えなかった。これは非英語圏において英語教育と布教活動が紙一重であることをしめす、きわだった事例である。

*9 念のため、彼の発言を真意がわかるように翻訳しておく。「進化論と創造科学論を教えることに賛成です。科学の時間に聖書を教えることはできませんが、化石の証拠が進化の証明には不十分であると批判しなければなりません。その批判方法としては、この宇宙がキリスト教の神によって創造されたことを科学的に証明しようとするインテリジェント・デザイン説がいいでしょう」となる。

*10 アメリカでもルテラン・チャーチ、アメリカユダヤ人会議、ユナイテッド・メソヂイスト・チャーチ、ユナイテッド・プレスピテリアン・チャーチは公立学校での創造論教育に正式に反対している。

*11 そもそもこの種のデベートは七〇年代にさかに行われ、すでにお互いの手の内を知っているのである。ああ言えばこう言い返すというマニュアルすらできていて、そのやりとりのほとんどがヴィスタ教育委員会での市民どうしのやりとりにもあらわれている。いずれにせよ科学的権威や科学的議論はヴィスタを救う糸口とはならなかった。

*12 有名な科学者は一人もかかわっていない。そもそも科学者の側には研究に忙しくてこのようなナンセンスにかかわっているひまはないという消極的な態度がある。他方、現地の人々にはハーバードやMITの偉い学者がなんと言おうと、現地に住んでいるわけではないから、その発言を重要視しないところがある。要するにここでは科学の権威があまり通用しない。

*13 じつさいACLUの訴訟委員会のチャールズ・バードはヴィスタ統合学校区の教育委員会に容赦のない手紙を何度か出し、「創造論を求めると、この地区は法廷闘争におちいる」と警告していた。

*14 「もしある学校区がその教育コードを破り創造論を教えたとしても、警官が来て教員を逮捕することはない」と州教育局の

ガイ・スミートがいう。つまり、ヴィスタ統合学区が強行に創造論教育をはじめても、誰もそれを止められないというのである。それを受けて、ヴィスタ統合学区教育委員会のスタッフ、マリリン・ウィーラーは「私の理解では、現地の教育委員会が方針を決める。州は単なるガイドラインにすぎない」と述べ、キリスト教ファンダメンタリスト委員の方針にしたがう意向を表明したことがあった。彼女はこの学区のサイエンス・カリキュラムの定期検査を担当した人物だ。カリフォルニア州では、各学区が七年ごとに自分の科学カリキュラムを定期検診している。

*15 ただし、「もし反進化論的なことが教えられると、市民は自分の子どもが他の子どもに比べてカレッジへの競争に負けるといふ理由で、訴訟することもある」と、州教育局のスポークスマン、スージー・ラングはつけ加えている。

*16 VTAは各公認候補に七五〇ドル提供し、CTAはバーバラ・ドノヴァンに三、〇〇〇ドル、その他の公認候補に二、五〇〇ドルずつ提供した。

*17 私のインタビュウにたいし、前委員のホリデイ氏やリコールされたティンダル氏はもう教育委員になりたいとは思わないと、きっぱりこたえた。じつさい、言動を歪曲した報道、誹謗中傷のやりとり、委員会運営の妨害に嫌気がさしていたようである。家族の犠牲も大きかったという。それに敗者としての挫折感が加われば、ふたたびこの仕事にもどろろという気にならないのは当然だと感じた。

*18 たとえば一九九三年二月、アメリカのCBSテレビはプライム・タイム特番として、「ノアの箱船の驚くべき発見―ある考古学的探究」というドキュメンタリーを二時間にわたって放送した。ジョージ・ジャメルという男がトルコのアラト山から奇蹟的に持ちかえった「箱船の木片」を片手に証言するハイライト・シーンに続き、ホスト役のダレン・マクガバンが「こうした証拠の一つ一つが聖書の洪水物語を裏づけている」と重々しい口調で締めくくる番組であった。

参考文献

- Editorial, "Vista School Board Takes up 'Creation Science' Issue Again," *Church and State*, vol.46, no.5, May 1993, pp.19-20.
- Raymond A Eve & Francis B Harrold, *The Creationist Movement in Modern America*, Boston: Twayne Publishers, 1991.
- Anna Maria Gillis, "Keeping Creationism out of the Classroom," *Bioscience*, vol.44, no.10, November 1994, pp.650-6.
- Sarah Henry, "How One Town Took on the Religious Right--and Won," *Ms.*, March/April 1995, pp.86-90.
- Gerald Holton, *Science and Anti-Science*, Cambridge: Harvard University Press, 1993.
- Liz Rank Hughes, ed, *Reviews of Creationist Books*, second edition (First edition edited by Stan Weinberg with the assistance of Paul Joslin), Berkeley: The National Center of Science Education, Inc, 1992.
- Phillip E Johnson, *Darwin on Trial*, second edition, Downers Grove: Inter Varsity Press, 1993.
- Edward J Larson, *Trial and Error: The American Controversy over Creation and Evolution*, Oxford: Oxford University Press, 1985.
- Barry W Lynn, "Vista's School Board: Model for Disaster," *Church and State*, vol.46, no.8, September 1993, p.23.
- David N Menton, PhD, "Inherit the Wind: A Historical Analysis," a research paper of Missouri Association for Creation (405 N. Sappington Rd. Glendale, MO 63122), 1994.
- Henry M Morris, *The Long War against God: The history and Impact of the Creation/Evolution Conflict*, second edition, Grand Rapids: Baker Book House, 1990.
- History of Modern Creationism*, San Diego: Master Book Publishers, 1984.
- Ronald L Numbers, *The Creationists: The Evolution of Scientific Creationism*, New York: Knopf, 1992.
- Christopher P Toumey, *God's Own Scientists: Creationists in a Secular World*, New Brunswick: Rutgers University Press, 1994.

George E. Webb, *The Evolution Controversy in America*, Lexington: the University of Kentucky Press, 1994.

The Los Angeles Times

Editorial, "Participate, Yes; Proselytize, No," December 21, 1993, p.B-6.

Michael Granberry, "Vista Board Oks Teaching Creationism," August 14, 1993, p.A-1.

"Recall Targets Vista Board's Creationists," February 14, 1994, p.A-3.

Elizabeth Shogren and Douglas Frantz, "School Boards Become the Religious Right's New Pulpit," December 10, 1993, p.A-1.

"Conservative Fire Spreads with School Board Sparks," December 11, 1993, p.A-1.

The San Diego Union-Tribune

Anna Cearley, "Christian Voters League Supports Embattled Trustees," January 7, 1994, p.B-1.

"Christian Voters League Comes to Aid of Embattled Vista Trustees," January 8, 1994, p.B-10.

"Vista Hires an Interim School Chief," June 25, 1994, p.B-5.

John Gains, "School Vote May Not Mean end of World," November 7, 1992, p.11.

Tim Mayer, "Parents Get Preview of Sex Classes," August 12, 1993, p.B-1.

Lisa Petrillo, "Christian Conservatives Gain Ground after Thorny Vista Board Battle," November 4, 1992, p.B1.

"Session Is Stormy in Vista: Creationism Spurs Debate at Meeting of School Board," December 28, 1992, p.B-1.

"Vista Schools Gird for 'Creation in Schools,'" December 28, 1992, p.B-1.

"Vista Oks 'Biblical Creation' in Schools," August 13, 1993, p.A-1.

"Scarred Vista School District Trying for Ideological Truce," March 14, 1995, p.B-3.

Lisa Petrillo and Leslie Wolf, "Results mixed for Christian Right," November 7, 1992, p.B-1.

Ernesto Portillo, Jr, "School Superintendent Keeps a Low Profile in Heated Vista District," September 9, 1993, p.A-1.

"Vista School Board Rejects Formation of a Task Force," September 10, 1993, p.B-3.

- "Friction among School Board Members Persists in Vista," September 11, 1993, p.B-10.
- "After First Year, Trustees Limited in Vista Impact," November 27, 1993, p.B-1.
- "Vista School Resources Stretched to Get 3 Major Projects under Way," December 18, 1993, p.B-11.
- "Vista School Debate Likely to Continue," December 18, 1993, p.B-1.
- "Recall Targets Vista School Board's Christian Trio," January 4, 1994, p.B-3.
- "Recall Bid to Fail, Trustees' Allies Say: Vista Defenders of School Board Majority Say Vote Would Be Costly," January 6, 1994, p.B-8.
- "Vista Recall Campaign Authorized," January 14, 1994, p.B-7.
- "Recall Drive Is Sputtering, Say Defenders of 3 Vista School Trustees," February 3, 1994, p.B-1.
- "Vista School Board Takes No-Tolerance Stance on Drugs," February 5, 1994, p.B-3.
- "Democratic Party Faces Accusations in Recall Try," February 9, 1994, p.B-4.
- "Move to Recall Vista Trustees Pushed Back: Organizers Now Look to November, Not June: Holliday Taken off List," February 14, 1994, p.B-1.
- "Foes Say Vista Recall Bid Lacks Support," February 15, 1994, p.B-3.
- "Split Panel to Urge 'Sex Respect' as Parent Option in Vista Classes," February 24, 1994, p.B-2.
- "Vista Has a Volatile Agenda on Tap Tonight: School Board to Consider Sex Respect, Humanism," March 17, 1994, p.B-1.
- "Vista 'Sext Respect' Faces Legal Challenge: School Trustees OK All-Abstinence Plan," March 19, 1994, p.A-1.
- "Teachers' Union Might Support Drive to Recall Vista Trustees," March 31, 1994, p.B-14.
- "Vista's Sex Respect Gets the Syndicated Talk-Show Treatment," April 1, 1994, p.B-4.
- "Vista Teachers Union Will Back Recall Effort against Two on Board," April 5, 1994, p.B-8.
- "Vista to Put Some Sext Topics Off-Limits in District Classes," April 9, 1994, p.B-9.

- "2 Trustees Draw Fire As Sex Ed Faces Changes," April 19, 1994, p.B-1.
- "Proposal on Sex Ed Is Tabled in Vista," April 22, 1994, p.B-1.
- "Vista School Board Faces Hot Agenda," May 5, 1994, p.B-3.
- "Vista School Board Clears the Way for Sex Respect Course," May 6, 1994, p.B-1.
- "Sex-Ed Course Is Approved for Vista Schools," May 7, 1994, p.B-2.
- "Vista Trustee Rules Out Re-Election Bid: Carter Adds She's Tired of Fighting: Extreme Right," May 11, 1994, p.B-2.
- "Vista Board Rejects School-Meals Funds," May 20, 1994, p.B-4.
- "Vista School Chief May Move to Smaller, Quieter Coronado," May 21, 1994, p.B-3.
- "Coronado Hires Vista Schools Chief," May 24, 1994, p.B-2.
- "100 Line Streets in Farewell to School Superintendent," May 25, 1994, p.B-1.
- "Attorney David Hubbard to Run for Vista School Seat," June 1, 1994, p.B-4.
- "Petition Tactics at Issue in Vista Recall Campaign," June 11, 1994, p.B-3.
- "Expenses Mount in Vista School-Recall Campaign," June 28, 1994, p.B-3.
- "Recall of Two Vista Trustees to Be on Ballot," July 12, 1994, p.B-1.
- "Fight for Vista Schools Seats May Turn Mean," July 14, 1994, p.B-14.
- "A 4th Administrator to Leave Vista Unified School District," July 27, 1994, p.B-1.
- "Registrar's Go-Ahead Sets Stage for Vista Schools Recall Election," July 30, 1994, p.B-5.
- "Vista Hires Headhunter to Find Schools Chief," August 7, 1994, p.B-2.
- "Conservative Leader Won't Seek New Term on Vista School," August 13, 1994, p.B-1.
- "5 Seek 2 Board Seats in Attention-Getting Vista School Election," August 18, 1994, p.B-14.
- "Teacher Group Endorses 2 School Board Candidates," September 1, 1994, p.B-3.
- "Vista Schools Threatened with Lawsuit over Sex Ed," September 14, 1994, p.B-2.

- "Vista Rivals Are Silent on Hot School Issues," October 7, 1994, p.A-1.
 "Vista School Board Alters district Mission Statement," October 7, 1994, p.B-1
 "Vista Oks Legal Group's Use in Sex-Ed Fight," October 8, 1994, p.B-4.
 "Vista Board's Quiet Prayer Exits View with No Fanfare," October 20, 1994, p.B-2.
 "Vista Fight over Policies Comes Down to Recall Vote," November 3, 1994, p.B-1.
 "Five in Overshadowed Vista School Race Make Final Push," November 5, 1994, p.B-1.
 "Vista School Board Delays Choice of Superintendent," November 5, 1994, p.B-9.
 "Campaign to Recall 2 Vista Trustees Is Winning," November 9, 1994, p.B-4.
 "Trustees' First Goal Is to Head Old Schism," November 10, 1994, p.B-1.
 "Vista Conservatives Vow to Regroup," November 11, 1994, p.B-1.
 "Vista Trustees Approve Panel to Resolve Religion-School Issues," December 13, 1994, p.B-3.

鶴浦 裕

- 「創造論の洪水におぼれるか、進化論」、東京大学出版会、『UP』、第三三九号、一九九二年九月、一―五頁。
 「州立サンフランシスコ大学ケニヨン事件――宗教教育と学問の自由――」、『札幌大学総合論叢』、第四号、一九九七年一〇月、三三―五八頁。
 「ビル・ホーニッグーアメリカの創造VS進化論争の第二のスコープス?――」、『札幌大学総合論叢』、第五号、一九九八年三月、頁未定。

(現地調査のさいウィリアム・スウェイツ夫妻の協力を得た。夫妻のご協力に感謝する。)

Summary

"Creation or Evolution: Educational Controversy in an American Small Town, Vista 1992-94"

Hiroshi Unoura

This article tried to show how creation-evolution conflict takes its shape at a small town in the present-day America. It required me to review the local newspapers, interview the key persons directly or on the phone, and attend one of the school board meetings. Observed in the environment of a small town, it turned out this creation-evolution conflict could not be picked up separately as a single issue. It appeared combined with such issues as sex education, bilingual education, etc. Including these issues, I described this two-year history of conflicts as follows.

At the election, November 1992, three seats of the five school board members of the Vista Unified School District, California, were occupied by the Christian fundamentalists. Immediately they made a voting bloc and began to control the board by 3-2 voting decision. First, they opened up the way for introducing creationism and criticism against evolution theory into the curriculum. Then, they changed the trend of sex education from the knowledge on "safe sex" to the emphasis on "abstinence." These radical changes stimulated liberal citizens and the Vista Teachers Association to form opposition groups, which finally purged the three Christian fundamentalists board members as the result of the election, November 1994.

Already in the court, the issue of teaching creationism has been resolved by the US Supreme Court decision in 1987. It is unconstitutional for public schools to teach creationism in their science classes. Actually, however, the stipulation is ignored, at least, by the Christian fundamentalist board members and their supporters.

Creation-evolution conflict still exists in almost all the towns in the United States. It flares up at the election year. If the both camps are strong enough, the conflict sometimes becomes a proxy war between the Republican and the Democratic Parties. Unfortunately, they do not know better than to exclude each other. In Vista, the Teachers Association played an decisive role in recalling the Christian fundamentalist board members. So long as they cannot find any compromise, they will repeat the conflict and heap grudges and resentments up to a next big court trial. But will it be an end to the creation-evolution conflict?